

三玉城跡

—特別高圧送電線北上幹線新設工事に伴う発掘調査報告書—



西上空より

平成20年3月

宮城県栗原市教育委員会
東北電力株式会社

三 玉 城 跡

—特別高圧送電線北上幹線新設工事に伴う発掘調査報告書—

序 文

このたび栗原市教育委員会では文化財調査報告書第8集を刊行することになりました。本書には現在でも堀跡や土塁、平坦面がきれいに残る中世城館である三玉城跡の発掘調査成果を収録しております。

三玉城跡は東北電力株式会社による特別高圧送電線北上幹線新設工事とかかわりを持ち、市町村合併以前の平成9年から旧栗駒町教育委員会では保存に向けて協議を行ってまいりました。その後、市町村合併により栗原市教育委員会が業務を引き継ぎ、平成17年度と平成18年度に発掘調査を実施しております。今回の調査により、中世城館の発掘調査例が少ない栗原市において、貴重な調査成果を得ることができました。南北朝時代に日本史上の出来事がおき、戦国時代には大崎氏と葛西氏などの戦国大名が活躍したこの地域は宮城県内においても中世城館の密度が大変高いものであり、今回の調査成果をもとに遺跡の保護や調査研究、啓発活動をさらに進めていきたいと考えております。

最後に発掘調査にご指導、ご協力を賜りました宮城県教育庁文化財保護課、東北電力株式会社、桜田地区の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後さらなるご支援、ご指導を賜りますよう、お願い申し上げ発刊のあいさつといたします。

平成20年3月

栗原市教育委員会

教育長 佐 藤 光 平

目 次

序文

目次

例言

I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1
II. 三玉城跡の歴史と構造	4
1. 歴史	
2. 構造	
III. 調査経過	7
1. 調査にいたる経緯	
2. 平成17年度確認調査について	
3. 平成18年度発掘調査について	
IV. 検出された遺構と遺物について	9
1. 基本層序	
2. 検出された遺構と遺物	
A. 城館期の遺構	
(1) 土木工事にかかわる遺構	
(2) 曲輪1で検出された遺構	
①建物跡 ②柱列跡 ③土坑 ④溝跡	
(3) 平場1で検出された遺構	
①建物跡	
(4) その他の遺構	
B. 城館期以前の遺構	
(1) 整地層下で検出した遺構	
C. 出土遺物	
(1) 縄文時代	
(2) 古代	
(3) 中世	
V. 考察	38
1. 城館期	
(1) 城館の立地と土木工事	
(2) 各遺構の特徴	
①重複関係 ②建物跡 ③柱列跡 ④土坑	
(3) 遺構の変遷	
(4) 城館跡の機能年代と調査区の性格について	
2. 城館期以前	

VI. まとめ	44
参考引用文献	
写真図版	
報告書抄録	

図目次

第1図 栗原市の位置	第12図 曲輪1 検出建物跡柱穴断面
第2図 三玉城跡と周辺の中世遺跡	第13図 曲輪1 土坑（1）
第3図 三玉城跡関係文書	第14図 曲輪1 土坑（2）
第4図 三玉城跡略測図	第15図 曲輪1 土坑（3）
第5図 平成17年度及び18年度調査区の位置	第16図 平場1 建物跡
第6図 調査地点測量図	第17図 平場1 検出建物跡柱穴断面
第7図 調査区平面図	第18図 平場1 検出建物跡模式図
第8図 土壘1、堀切1、土壘2、堀切2、土壘3断面	第19図 土壘2・3 整地層下検出土坑
第9図 曲輪1、堀切1、平場1、西側の整地層断面	第20図 遺構の重複関係
第10図 曲輪1 建物跡	第21図 曲輪1 検出遺構変遷案
第11図 曲輪1 検出建物跡模式図	第22図 八幡館跡縄張図
	第23図 森館跡略測図

表目次

第1表 三玉城跡と周辺の中世遺跡	第6表 土壘2・3 整地層下検出土坑断面
第2表 北上幹線新設工事関連遺跡	第7表 出土遺物集計表
第3表 曲輪1、堀切1、平場1、西側の整地層断面	第8表 遺構属性表（1）
第4表 曲輪1 ピット属性表	第9表 遺構属性表（2）
第5表 平場1 ピット属性表	

写真図版目次

写真図版1 調査以前の三玉城跡

空中写真 三玉城跡全景、西より 調査地点、南より 調査地点、西上空より 三玉城跡全景、北より 堀切2、土壘1、堀切1、曲輪1、北より 調査前の調査区、西より 曲輪1と平場1、西より

写真図版2 城館期の遺構（1）

調査区全景、西上空より 土壘3、堀切2、土壘2、土壘1、西より 土壘3、堀切2、土壘2、平場1、西より 土壘2、堀切1、曲輪1切岸、南東より 土壘2、堀切1、土壘1、曲輪1切岸、南西より 堀切1の底面、北より 堀切1北端の状況、南西より 堀切1と平場1、北西より

写真図版3 城館期の遺構（2）

土壘2・曲輪1間の堀切1断面、南より 土壘2、堀切1断面、曲輪1切岸、南より 堀切1ABC断面、西より 堀切1AB断面、西より 堀切1C断面、東より 堀切1A断面、南東より 堀切1AC、南西より 堀切1A断面、南東より

写真図版4 城館期の遺構（3）

土塁3、堀切2、土塁2、南より 土塁3、堀切2、土塁2、北より 土塁2断面、南西より 堀切2断面、南より 堀切2調査区南側断面、北より 土塁3断面、南東より 土塁3西侧の整地断面、東より 土塁3西侧整地層から西17m付近での断面、南東より

写真図版5 城館期の遺構（4）

曲輪1、東より 曲輪1、東より 曲輪1、北東より 曲輪1、北東より 土塁1、南東より SK33、南より SK34、東より SK2断面、東より

写真図版6 城館期の遺構（5）

SK30、SK31、東より SK30、SK31断面、北より 土塁1断面、北東より 曲輪1整地層断面、北東より 曲輪1整地層下の落ち込み、南東より 平場1建物跡、北より 平場1整地層断面、北西より 平場1整地層断面、南東より

写真図版7 城館期以前の遺構

旧表土除去状況、西より 旧表土除去状況、南西より 旧表土除去状況、南より SK25、南より SK26、27、西より SK26断面、北西より SK27断面、北西より SK28断面、北より

写真図版8 出土遺物

例　　言

- 本書は東北電力株式会社宮城支店による特別高圧送電線北上幹線新設工事に伴う三玉城跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査から報告書作成にいたる一連の作業は、調査原因となった事業主である東北電力株式会社宮城支店の依頼を受けて栗原市教育委員会が行ったものである。
- 調査は次の要項で実施した。

遺跡名 三玉城跡（遺跡登録番号43067）

所在地 栗原市栗駒桜田中有賀、簡淵地内

調査面積 板設道確認調査地点 400m²

鉄塔事前調査地点 1,198m²

調査期間 地形測量 平成17年3月～4月

確認調査 平成17年8月23、24日

調査区測量 平成18年6月14日～7月10日

事前調査 平成18年7月14日～10月31日

調査主体 栗原市教育委員会教育長 佐藤光平

事務局 栗原市教育委員会文化財保護課

課長 遠藤義勝 課長補佐 佐藤恒介

埋蔵文化財係 千葉長彦 大場亜弥 安達訓仁

文化財係 高橋和智 青野圭一 三浦実

調査担当 確認調査 千葉長彦、三浦実、安達訓仁

事前調査 安達訓仁、大場亜弥、柳沢和明（宮城県教育庁文化財保護課）

調査指導 宮城県教育庁文化財保護課

調査協力 栗駒桜田上地区 栗駒桜田下地区 第9工区企業共同体 松岩寺

発掘調査参加者 若生志津子 小野寺清悦 庄司佳朗 佐藤愛美 鈴木征夫 小野寺憲治

石川 卓 白鳥綾子 曽根 煥 小野寺秀太郎 志水謙一 芳賀雅子

整理作業参加者 芳賀雅子、若生志津子、鈴木浩枝

4. 遺構番号は通し番号を各遺構に付した。

5. 土層や土器の色調表現は『新編標準土色帳（20版）』（小山・竹原編1997、株日本色研事業）に準拠し、土性区分については国際土壤学会に準拠している。

6. 図中にある方位は真北を表している。

7. 調査区全体図は1/200、遺構の縮尺は1/60、土木工事にかかる遺構の断面図と建物跡は1/100、建物模式図は1/200を基本とし、遺構断面図は1/60に統一し、スケールを添えた。また、遺物は1/3に統一した。断面黒塗りは須恵器を示す。

8. 遺物写真的縮尺は1/3である。

9. 第2図は国土地理院作成の数値地図「岩ヶ崎」と「金成」、第4図は東北電力が作成した測量図を参考として、全体図を作成した。また、第22図の八幡館跡縄張図は室野秀文氏より提供いただいた。

10. 発掘調査及び報告書作成に際し、次の方々よりご指導、御助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

真山悟、後藤秀一、佐藤則之、須田良平、佐藤憲幸（宮城県教育庁文化財保護課）、佐藤信行（日本考古学協会員）、川又隆央（岩沼市教育委員会）、及川真紀（奥州市世界遺産推進室）、室野秀文（盛岡市教育委員会）、酒井亜希子（登米市歴史博物館）、大崎市教育委員会、登米市歴史博物館

11. 発掘調査の成果の一部については、現地説明会（平成18年9月8日開催）、平成18年度宮城県遺跡調査成果発表会（平成18年12月10日、東北歴史博物館）、宮城考古学第9号で公表しているが、すべてにおいて本書が優先する。

12. 調査によって得られた資料は、全て栗原市教育委員会（栗原市築館文化財管理センター）で保管している。

13. 本書の執筆、編集は調査員の協議を経て安達が行った。

I. 遺跡の位置と地理的、歴史的環境

宮城県北西部に位置する栗原市は岩手、秋田両県と接している。栗駒地区はその中でも北西隅に所在し、宮城県北部を南北に貫く奥羽山脈と岩手県から宮城県北東部にかけて伸びる北上山地に挟まれた北上川沿岸低地（仙北平野低地）のうち、北上川流域右岸の一画に位置している。



第1図 栗原市の位置

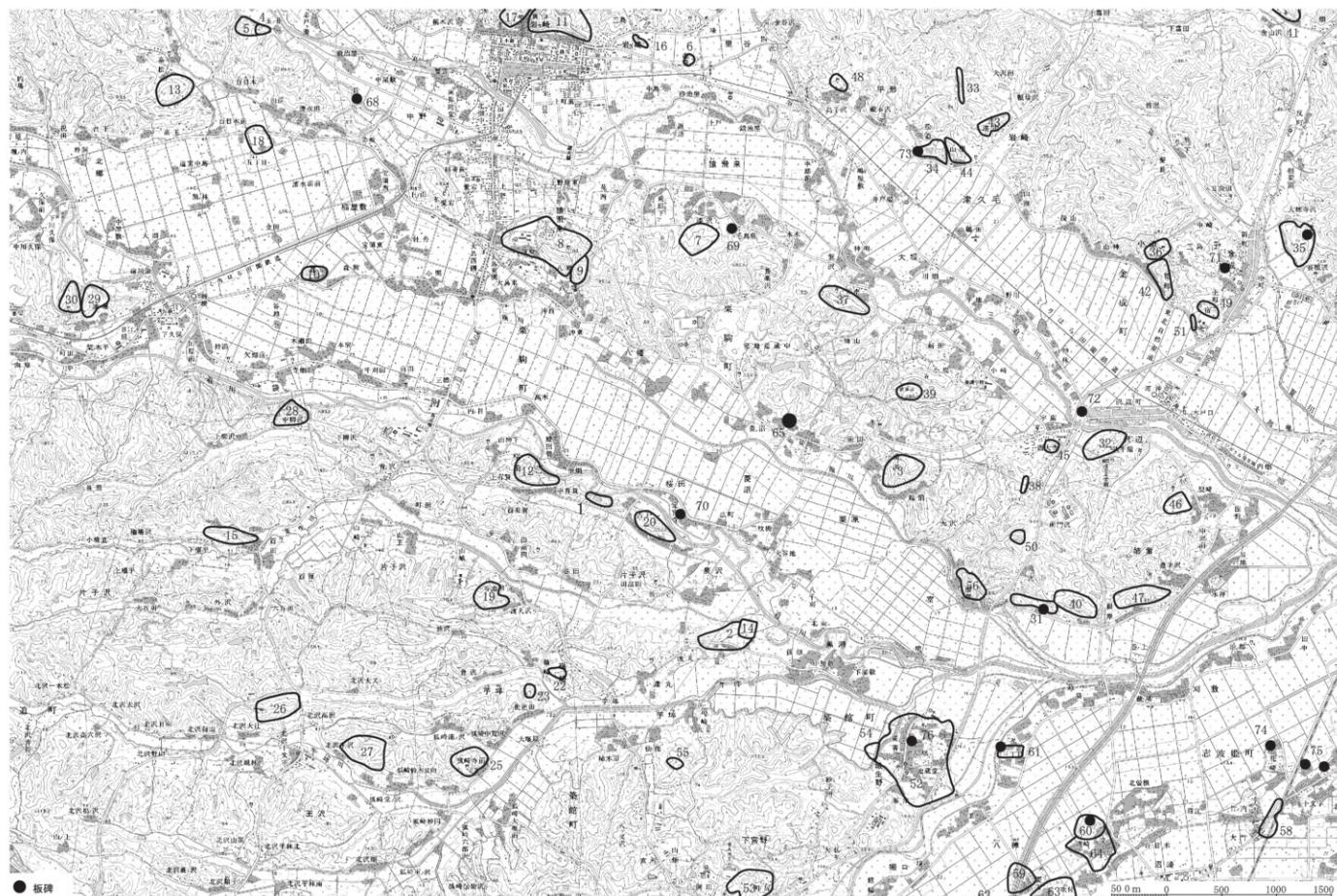
ここは奥羽山脈から次第に標高を減じながら緩やかな起伏をもって南東方向に連なる派生丘陵のほぼ末端部にあたり、標高約20~60mのなだらかな丘陵地帯や河岸段丘を形成している。奥羽山脈に源を発する一迫川、二迫川、三迫川などにより複雑に開析されて樹枝状となった幅の広い谷底平野やその麓には低地（後背湿地や自然堤防）が広がる（宮城県企画部土地対策課1986）。

三玉城跡はこの丘陵地帯のうち東側に伸びる丘陵上、標高約20~54mの地点に立地している。北側には二迫川が東流し、南側には東西方向に伸びる谷底平野がひろがる。本遺跡は現在、宅地、田地、畠地、山林として利用されている。

本遺跡の周辺には縄文時代から中・近世にいたるまでの遺跡が多数分布する。これらの多くは河川流域の丘陵や段丘上に認められる。ここではこれまでの調査・研究の成果から、中世の歴史的環境を記述する。

中世の遺跡としては城館跡や板碑群、生産遺跡などが確認されている。二迫川沿岸や三迫川沿岸の丘陵上や段丘上に津久毛橋城跡、大原本館跡（鎌倉城跡）、黒岩館跡、鶴丸館跡（栗駒町教育委員会1978）、八幡館跡、臥牛館跡、猿飛来館跡、長綱沢館跡、森館跡、亀井館跡、下館跡、長者原館跡、要害内館跡など多数の城館跡がある（宮城県教育委員会1998）。しかし、現況の遺構分布状況を確認する作業は進んでおらず、発掘調査例も少ないので、この地域の中世城館の構造は現在充分に検討できない状況である。数多くの館跡が確認できる要因の一つとして三玉城跡付近を通る中世までさかのぼる可能性を考えられる上街道（宮城県教育委員会1978）があることから交通上要衝の地であったことがあげられる。また、津久毛橋城跡、鎌倉城跡、八幡館跡などは興国4年（1348）におきた三迫の合戦に登場するものであり、さらに、戦国時代には大崎氏と葛西氏による領土の境界付近であったため、騒乱の場となつたこともあげることができる。集落遺跡は明確には捉えられていないが、原田遺跡（宮城県教育委員会1980b）、伊治城跡（築館町教育委員会1996）（築館地区）では、中世の堅穴造構と類似する遺構が確認されている。また、吹付遺跡（宮城県教育委員会2005）、鶴ノ丸館跡（宮城県教育委員会1981）、宇南遺跡（宮城県教育委員会1979、1980d）（志波姫地区）では掘立柱建物跡と井戸跡が確認されている。長者原遺跡（藤沼・神宮寺1992）（栗駒地区）では昭和41年（1966）の開田作業中に多量の古銭（56銭種、4,325枚、最新銭種「至大通宝」）が発見されている。

まとまって分布する板碑群としては三玉城跡付近では二迫川北岸にある竹の内屋敷（対岸の字「竹の内」付近）にあった天台宗と伝えられる淨願寺跡から5基の板碑（延文6年、永享5年、応永3年、康



第2図 三玉城跡と周辺の中世遺跡

No.	遺跡名	種別	立地	時期	城主
1	三五城跡	城館	丘陵	中世	
2	長者原遺跡	集落	丘陵	古墳前・中・奈良・平安	古銭出土。土師質土器
3	栗原船跡	城館・散布地	丘陵	绳文・中世	栗原讃岐、栗原岐嶽守(風土記)
4	东の井船跡	城館	丘陵	中世	五ノ井半内(風土記)、玉野井半内(古碑書立)
5	东の井船跡	城館	丘陵	中世	五ノ井半内室御候(風土記)
6	熊谷森船跡	城館	丘陵	中世	鐵守村平貞盛・熊谷院・正庭、後葛西家臣板倉伯香(風土記)、熊谷伯香(古城書立)
7	駿飛丸船跡	城館	丘陵	中世	駿河河岸(風土記)、駿河治部(古城書立)
8	八幡船跡	城館	丘陵	中世	石川郷人(古城書立)
9	風牛船跡	城館	丘陵	室町?	大崎家臣石川郷人(風土記)
10	森船跡	城館	丘陵	中世	森因幡守守則(風土記)、森河防(古城書立)
11	羽ヶ崎船跡	城館	丘陵	中世・近世	鶴丸館、宮沢日向の直景(風土記)、富沢日向(古城書立)
12	板田船跡	城館	丘陵	中世	龜井館、龜井六郎(風土記)、桜田箇中(古城書立)
13	大平船跡	城館	丘陵	中世・近世	虎庭大膳(風土記)
14	長者原船跡	城館	丘陵	中世	不明(風土記)
15	印高野船跡	城館	丘陵	中世	大崎義兼・印高野但馬(風土記)
16	印中船跡	城館	丘陵	中世	富沢日向印中但馬(風土記)
17	黒羽船跡	城館	丘陵	中世	富沢日向
18	東若内船跡	城館	段丘	中世	千葉成連入道、富沢五郎(風土記)
19	長納沢船跡	城館	丘陵	中世	片子沢但馬(古城書立)、大崎家臣佐藤様之助、佐藤河内(駿松村註)
20	大船跡	城館	丘陵	中世	
21	町田船跡	城館	丘陵	中世	地点不明(駿松村註)
22	野々目船跡	城館	丘陵	中世	不明(駿松村註)、H19発見。遺跡未登録。
23	駿谷船跡	城館	丘陵	中世	不明(駿松村註)、H19発見。遺跡未登録。
24	立崎船跡	城館	丘陵	中世	地点不明(駿松村註)
25	鷲崎船跡	城館	丘陵	中世	大庭萬次郎(古城書立)、大場萬次郎隆景(駿松村註)
26	町田船跡	城館	丘陵	中世	不明(風土記)
27	王沢船跡	船跡	丘陵	中世	
28	豊後船跡	城館	丘陵	中世	總神寺城。袋魯後(古城書立)
29	後藤船跡	城館	丘陵	中世	大崎家臣後藤平馬之米高店(風土記)
30	曾原船跡	城館	丘陵	中世	
31	時雨橋六島群	橋	丘陵・島群	丘陵斜面	板碑1基
32	沢切船跡	城館	丘陵	中世	風牛館。葛西氏家臣一堀堂刑部、後その子孫沢切町翁(風土記)
33	平野十三塚	十二塚	丘陵尾根	近世	
34	津久木船城跡	城館・散布地	丘陵	古代・中世	
35	金成船跡	城館	丘陵	中世	金田城、東坂、南坂、西坂。赤坂櫻木信高(東坂)、横次木浦城内のち金成内蔵(南坂)、金成内蔵(古城書立)。金成内蔵父は大和(古城書上)。東坂に長根原板碑群6基。
36	小辺觀音跡	寺院	丘陵	中世	
37	大原木船跡	散布地・城館	丘陵	绳文・晚・中世	鉢木館、笠穂城。鉢木三河守(風土記)、古城書立。
38	西大寺十三塚	十二塚	丘陵尾根	近世	
39	肥田山空謙跡	城館・散布地	丘陵	绳文・中世	
40	上船跡	城館	丘陵	平安	藤原參衡家臣姫舟平治光景(風土記)
41	高船跡	城館	丘陵	中世	煙对馬守(古城書立)
42	西船跡	城館	丘陵	中世	金成大和(古城書立)
43	長崎船跡	城館	丘陵	中世	長崎主殿。後、石川謙岐(風土記)
44	引崎船跡	城館	丘陵	中世	岩崎謙岐(風土記)、近藤伊賀守忠清(近藤氏系図)
45	西船跡	城館	丘陵	中世	水戸五右衛門(古城書上)、沢田理亮の子、沢田右衛門と弟沢田兵衛
46	駿崎船跡	城館	丘陵	中世	駿崎右近(古城書上)、駿崎近江(古城書上)。葛西家臣佐藤清左衛門安信(仁暦堂氏系図)
47	下船跡	城館	丘陵	中世	平治様光景・御子姫舟白馬光(風土記)
48	平野船跡	城館	丘陵	近世	不明(風土記)
49	荒崎船跡	城館	丘陵	中世	大崎家臣荒原民輔小林長善(奥州大原郡金成邑野熊三所社縁起記)
50	瀬ノ沢船跡	城館	丘陵	中世	H18発見。遺跡未登録。
51	高見山十三塚	十二塚	丘陵尾根	近世	
52	伊治城跡	古墳・官館・居館・集落	段丘	四石器、古墳前・中・奈良・平安・中世	建物、土坑、中世陶器、貿易陶器(青磁)、土師質土器、古銭
53	宮野城跡	城館	丘陵	中世	宮野豊後(古城書立)
54	宮城跡	城館	丘陵	中世・近世	宮左馬之介(古城書立)
55	西船跡	城館	丘陵	中世	城生野赤左衛門(正延元年筑古船城主)
56	相模坂船跡	城館	丘陵	中世	不明(駿松村註)、H19発見。遺跡未登録。
57	泊ヶ崎船跡	城館	丘陵	中世	地点不明(駿松村註)
58	大門遺跡	集落	段丘	绳文・奈良・平安・中世	
59	綱ノ丸船跡	城館・集落	段丘	綱文・奈良・共生・近世	源田氏の別館(志波姫の歴史)
60	白良船跡	城館	段丘	中世	源田四郎左衛門(風土記)、板碑1基。
61	刈敷船跡	城館	自然堤防	中世	白山古舌。刈敷馬之丞(風土記)。白山神社に板札1基。
62	宇南遺跡	集落・城館	段丘	绳文前・晚・弥生・近世	蘿坑、貿易陶器(青磁)
63	吹付遺跡	集落	段丘	古代・中世	丹戸跡、中世陶器、板碑4基出土。
64	説置跡	散布地・集落	丘陵	平安・中世	

第1表 三五城跡と周辺の中世遺跡

暦2年、永徳3年、松岩寺藏）（栗駒町1963、栗駒町教育委員会1995）と硯が出土している。この他、二迫川左岸には金装板碑を含む67基が所在する往生寺板碑群（栗駒地区）（栗駒町教育委員会1995）、一迫川左岸には題目板碑を持つ26基からなる妙教寺板碑群（一迫町教育委員会2005ab）などがあり、中世以来続く寺院の境内地で確認できるものが多いことを特徴としてあげることができる。また、伊治城跡では道祖神社に2基の板碑が所在するとともに、昭和53年度、宮城県多賀城跡調査研究所により実施された調査で、ピット26より火葬骨と古銭5枚（永楽通宝2、洪武通宝1、開元通宝1、不明1）が出土（宮城県多賀城跡調査研究所1978）しており、墓であった可能性がある。

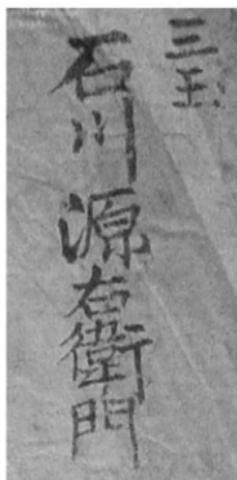
生産遺跡としては築館地区及び登米市迫町にまたがり分布する瓷器系の中世陶器を焼成した伊豆沼窯跡群（藤沼邦彦1976ほか）がある。昭和53年度に東北歴史資料館により熊野B窯跡3基のうち、2基について発掘調査が行われている（東北歴史資料館1979）。また、近年、高清水地区に所在する仰ヶ返り地蔵前遺跡では東北学院大学佐川ゼミナールの発掘調査によりロストル式の瓦窯跡が2基確認されている（東北学院大学佐川ゼミナール・藤原2007）。

II. 三玉城跡の歴史と構造

1. 歴史

三玉城跡について中世の文書から確認できる例はなく、江戸時代前期に作成された『仙台領古城書上』（仙台叢書刊行会1922）にも記載されていない。江戸時代中期頃に記述されたと考えられる『佐沼古戦場記』（追町史編さん委員会1974）の巻末に「天正年中中奥筋古館主」として37名の城館名と館主が記載されており、その中に「三玉 石川源右衛門」とある。そのほかのものとしては、『栗駒町の文化財第10集 町内城館跡』（栗駒町教育委員会1982）に「弘和2年(1382)の頃、八幡伏牛城主石川清輝の三男、石川親康が桜田城と称し居住した」と伝えられるがそれ以前は不明とし、その後、「慶長年間（1596～1615）、伏牛城主石川重久の子石川源右衛門重時が三玉城と称し居城し、慶長17年（1612）に死亡した」と記述している。また、石川氏については柴桃正隆氏が葛西氏家臣団を丹念に調べ上げた『戦国大名葛西家臣団事典』（柴桃正隆1990）の中で栗原市金成津久毛岩崎石川氏所蔵の系図に「明応3年（1494）石川飛驒頼重が栗原郡三迫の桜田古城から長崎館に移った」という記述を紹介している。これらの記述のもとなつた原典や同時代資料は確認することができないが、江戸時代の伝承から三玉城跡の城主が石川氏であった可能性が考えられる。

なお、城跡の登録名称となっている「三玉」は現在地名としては確認できないが、古戸橋付近に「道玉」、二迫川の北側に戸名として「ミダマ」がある。この地名は応永25年（1418）の年号を



第3図 三玉城跡関係文書
(登米市歴史博物館蔵)

持つ白鷺山文書（「鷺沢諸郷先達職預ヶ状」）のなかに「鳥谷のみこ」があずかる分として「ふくろ、かたこ澤、しまめくり、さくら田」など現在でも桜田地区周辺で確認できる地名とともに「みつたま」が記載される（宮城県史編纂委員会1960、古川市2001、註）ことから、中世までさかのぼる地名であると考えられる。

註 但し、古川市2001では「みつまた口」としている。

2. 構造

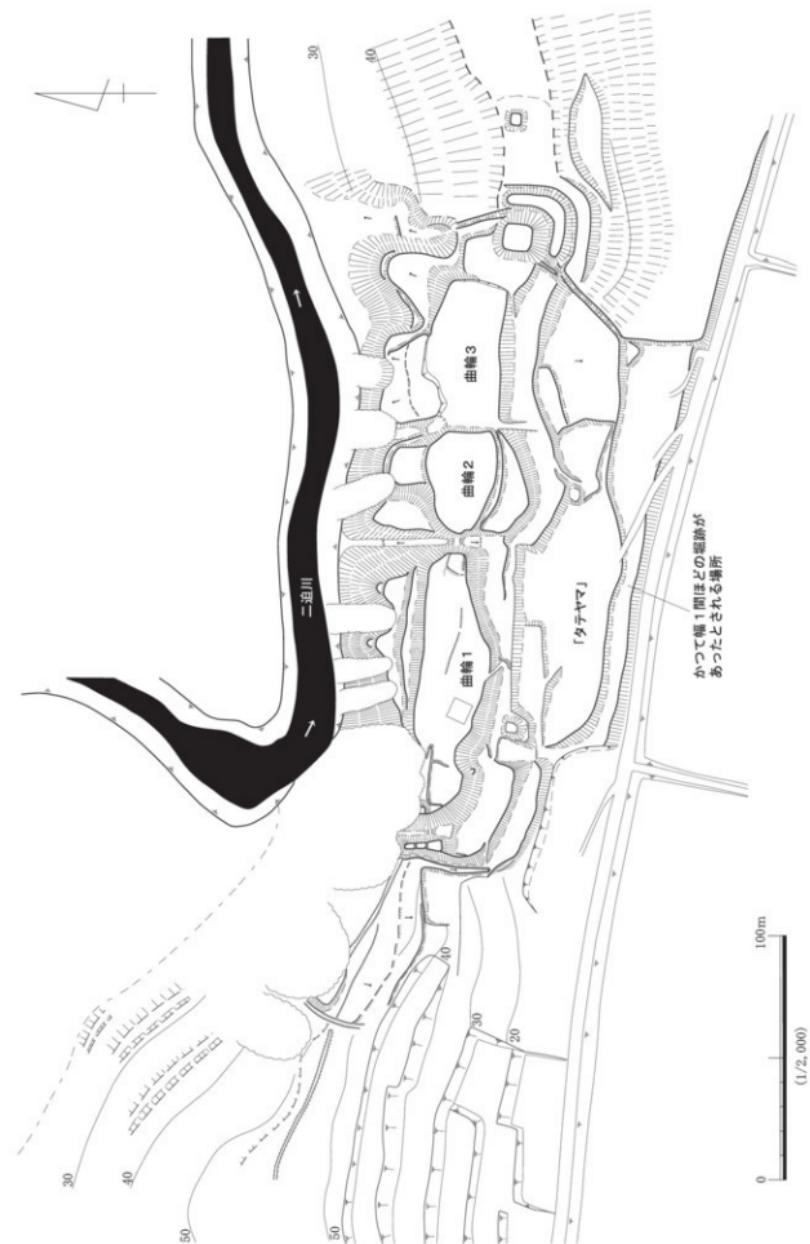
三玉城跡は東西方向にのびる比較的幅の狭い丘陵上に位置する。この丘陵の南側には幅の広い谷底平野、北側には二迫川、沖積平野が広がる。

三玉城跡で確認できる遺構には、丘陵の頂上部分に大きく3つの平坦面（曲輪1～3）があり、それぞれの曲輪が幅10mほどの東西方向の溝（堀切1～3）で分断されている。それぞれの曲輪の規模は南北の幅がおよそ25～40mで、一番西側にある曲輪1は東西105m、曲輪2が40m、曲輪3は開田による削平で詳細は把握できないが、およそ60mである。曲輪の周囲は切岸が設けており、高低差が6m前後で斜面は急な傾斜となっている。これらの曲輪は規模が大きく、防御面もしっかりとしていることから三玉城のなかでは中心となる平坦面であったと考えられる。曲輪1の東端には高まりがみられ、土壘と考えられる。曲輪3の東方には幅10m、高さ3mの高まりがある。城館期の遺構ならば櫓台、江戸時代のものならば「安永風土記」（栗駒町教育委員会1989）にみえる伊豆権現社にかかる遺構の可能性がある。

これらの主要な3つの曲輪の南側や北側の斜面にはさらにいくつかの平坦面がある。これらの平場は斜面部分を登って攻めてくる敵に備える空間あるいは居住、作業空間などであったと考えられるが、開田や宅地造成の影響により本来の構造は捉えにくい。

城跡の西端の範囲は構造からみてもはっきりしており、西側から土壘3、堀跡2、土壘2、堀切1、土壘1と曲輪1を確認でき、二重の堀と三重の土壘で厳重に守られている。さらに、この西側の尾根付近でも削平はしっかりと行われないが、平坦に近い緩斜面がみられる。土壘3の西側約40m付近には溝状の浅い窪みが南北方向に伸びて、北側では沢につづく。東側は西端ほど明確ではないが、曲輪3東端付近にある高まりの東側に北側から続く溝状遺構と土手状の高まり、さらにこの南側にも同様に溝状の窪みと平坦面が確認できる。西端同様、城跡の東端には2重の土壘と2条の堀切が設けられたと考えられる。

南側斜面については今まで幅1間ほどの堀があったという。この痕跡は1964年に国土地理院が撮影した空中写真でも読みとることができ、これが西側で確認している堀切2の方向に伸びていき、一連の堀であるようにみえる。さらに東側でも同規模の堀切と考えられる浅い窪みが南北方向に伸びて、曲輪3東側にある高まり付近までのび、東に向かってかえて伸びている。このことから、曲輪1～3の南面は西側から南側、さらに東側にかけて大きく堀で囲っている空間が存在する可能性が考えられる。なお、この堀で囲まれる範囲は現在戸名として「タテヤマ」と呼ばれている。



第4図 三玉城跡略測図

III. 調査経過

1. 調査にいたる経緯

東北電力では電力の安定供給を目的として仙台地区を中心として東北六県及び新潟県の東北電力管内を結ぶ50万ボルト系統とこれを補完する27万5千ボルト系統の整備を長期構想のもと進めてきた。北上幹線高圧送電線新設工事計画は北部基幹系統整備の一環として、岩手変電所（岩手県玉山村）から宮城変電所（宮城県加美町宮崎）までの区間に高さ100mの鉄塔を新設するもので、昭和58年頃より用地交渉が開始されている。栗原市内では平成4～6年度にかけて埋蔵文化財の取り扱いについて協議が開始された。対象遺跡は表2のとおりである。平成9年度以降、一迫町教育委員会や栗原市教育委員会が主体となり確認調査あるいは工事立会いが実施してきた。

遺跡名	地区名	協議	調査	成 果	備 考
八幡土塁跡	栗駒地区	H6	—	—	H10登録抹消（宮城県教育委員会1998未掲載）
三玉城跡	栗駒地区	H9	H16～18	城館期および古代の遺構	本書
大久保遺跡	一迫地区	H6	H9・18	遺構・遺物なし	H20架線工事ドラム設置部分確認調査予定
下大土遺跡	一迫地区	H17	H18	時期不明の溝1条	

第2表 北上幹線新設工事関連遺跡

三玉城跡については昭和55年に刊行された『栗駒町の文化財』に掲載されていたが、遺跡登録が実施されず、宮城県遺跡地図には記載されていなかった。平成9年に協議書の提出をうけ、宮城県教育委員会、栗駒町教育委員会、東北電力により現地踏査が行なわれ、城館の遺構が極めてよく残存していることから、鉄塔の位置変更を含む保存協議が開始された。しかし、東北電力で検討を行ったが、既に送電線にかかわる土地買収と登記が終了しており、電気事業法にかかわる規制から架線の位置を変更することが困難であることが判明した。このことから現状保存は難しく、発掘調査により記録保存を行う必要が生じた。

平成16年度は三玉城跡の地形測量、平成17年度は仮設道路部分の確認調査、平成18年度は鉄塔部分の事前調査を実施し、報告書作成は平成19年度に実施することとなった。

なお、平成10年度刊行の『宮城県遺跡地図』（宮城県教育委員会1998）に図示された後、平成13年度に遺跡発見届が提出され、「三玉城跡、遺跡登録番号43067」として遺跡登録が行われている。

2. 平成17年度確認調査について

鉄塔建設に伴う工事用仮設道路造成地点は二重の掘切と土塁の西側にあたり、館跡の範囲の外側にあたると考えられる。この地点は牧草地や栗林、畑などに利用されている。事前の地形観察ではいくつかの平坦面が存在していた。この平坦面は昭和37年に国土地理院により撮影された空中写真では確認できないことや、畑の区画として用いられていることなどから近年の造成によるもの可能性が考えられた。

III. 調査経過

確認調査は切土が行われる範囲を中心として斜面に直交する位置に6本（幅2~9m、長さは任意）設定し、重機を用いて掘り下げを行った。いずれの調査区でも耕作土（層厚0.2~0.3m）を除去すると地山であった。旧表土は確認できないので、削平を受けていることが判明した。しかし、尾根に近い法面部分の上部では旧表土、黄褐色土などを確認したので、丘陵頂上部付近は旧地形が残存している可能性が高いと考えられた。協議により、地形が残る部分は仮設道造成工事から除外することとなった。

確認調査では城館にかかわる遺構や遺物およびそのほかの時代の遺構や遺物の確認できなかった（註）。

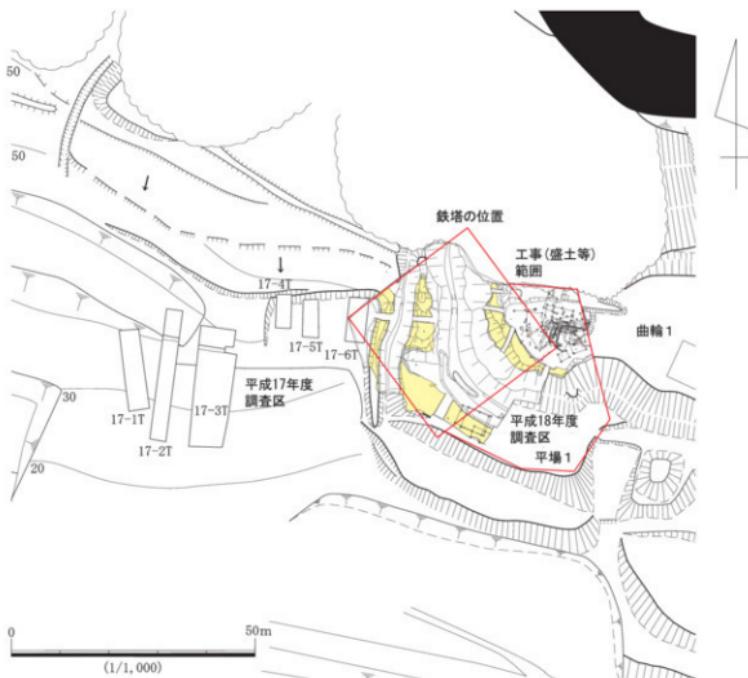
註 平成18年度の調査により、土塁3の西側で整地が行われていることが判明したことから、平成17年度調査区のうち尾根に近い法面に設けた調査区の再検討を行い、旧表土上で確認された黄褐色土は中世城館に伴う整地層であることが判明した。

3. 平成18年度発掘調査について

鉄塔建設部分及び盛土などが行われ、工事で使用される敷地を調査対象として調査区を設定した。この地点は三玉城跡の西端付近にあたる。平成18年5月26日付で契約を行い、6月6日より下草刈りを行った。現況記録作成のため、空中写真及び各遺構の近景写真を撮影の後、6月21日よりアイシン製の電子平板「遺構くん」をもちいて現状の測量図を作成した。現況記録作成の後、7月15日より曲輪1は手掘り、そのほかの部分については重機を用いて表土及び堀堆積土の除去を行い、その後、曲輪1、平場1で人力による遺構検出作業を実施した。9月21日までに切岸及び堀堆積土の除去を終了し、曲輪1、平場1で掘立柱建物跡、鍛冶遺構、焼土遺構、土坑、溝跡などの遺構が確認された。遺構検出作業の途中ではあったが、調査の概要が判明した9月8日に現地説明会を開催し、約100名の参加者があった。その後、堀切部分の土層観察用のベルトを除去し、9月15日に空中写真撮影を行った。引き続き、曲輪1、平場1において建物跡などの検出作業及び精査を行い、10月より城館にかかわる整地層を曲輪1と土塁2については人力で、平場1と土塁3は重機を用いて土層観察を行いながら除去を行った。曲輪1では城館期の整地層が入る楕円形の落ち込み、土塁2、3周辺では灰白色火山灰が堆積し、焼土粒や炭化物を含む土坑が確認され、平場1では城館期以前の遺構は確認されなかった。これらの諸記録を作成し、10月31日に器材を搬出し、現地調査を終了した。

また、12月から3月にかけて館跡全体の構造について再度踏査を行うとともに三玉城跡から桜田城跡の間、三玉城跡と下館跡の間の丘陵についても踏査を行い、遺構の有無について確認作業を行い、確認された遺構は1/1,000の略測図を作成した。

整理作業は平成18年度に一部図面整理などを実施したが、諸般の事情で実施できず、本格的な整理作業は平成19年度に行うこととした。平成20年1月29日付で委託契約を結び、図面整理、遺物整理などを実施し、本文執筆などの作業を行い、平成20年3月25日に事業のすべてを終了した。



第5図 平成17年度及び18年度調査区の位置

VI. 検出された遺構と遺物

1. 基本層序

調査区内で確認された基本層序は以下のとおりである。

I層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト～にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト。笹の根を多く含む。表土。

II層 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト。整地層や土壌積土の直下に分布する。旧表土。

III層 地山は標高の高い地点から以下の層を確認した。④は平場1、土壌3付近に分布する。堀切は地山の違いで掘削は停止せず、①においても約2m掘り下げを行っている。

- ①灰色 (2.5Y7/1) 砂。凝灰岩質で極めて硬い。
- ②にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト。礫や木炭を含む。火碎流再堆積層。
- ③明黄褐色 (10YR7/6) シルト。
- ④にぶい黄褐色10YR6/3砂で灰白色砂小ブロックを斑状に含んでいる。

2. 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、土木工事にかかわるものとして曲輪1、平場1、土壘3条、堀切3条、切岸、整地層がある。曲輪1では掘立柱建物跡12棟、柱列3条、土坑12基、溝跡3条、組み合わないピット40基、平場1では掘立柱建物跡3棟、組み合わないピット6基、土壘2積土下では土坑1基、土壘3積土下では土坑3基、調査区北西側で土坑1基が確認された。表土や遺構堆積土から縄文土器、石器、須恵器、土師器、土師質土器、鉄製品、石製品が少量出土している。

以下、城館期にかかわる遺構とそれ以前の遺構について説明し、出土遺物はまとめて記述する。

A. 城館期

(1) 土木工事にかかわる遺構

土木工事にかかわるものとして曲輪、平場、土壘、堀切、切岸、整地層がある。

【曲輪1】

調査区内での最高地点、標高約49.8～51.0mに位置する。調査区内では南北約16.6m、東西17.5m以上が確認され、平坦面はさらに東側に約90mのびる。整地層は平坦面の西側から南側縁辺で確認された。長さ17m、幅4.3m、厚さは最大で0.8mである。地山を削り出し、旧表土上ににぶい黄褐色砂、浅黄色砂、明黄褐色砂質シルトにより断面三角形状の整地が行われ、幅2mの平坦面を造成している。整地は標高の高い地点から低い地点に行われており、土壘1と同時に構築されている。整地層下部の南側斜面の旧表土上面で南北3.06m、東西5.40m、深さ0.48mをはかる楕円形の落ち込みが確認された。底面付近には硬くしまる明黄褐色粘土質シルト層があり、整地層により覆われる。城館の造成にかかわる遺構とみられる。

遺物は表土より石器、焼けた粘土、時期不明の土器、旧表土より縄文土器が出土している。

【平場1】

曲輪1の南側、堀切1をはさんだ南側に位置し、土壘2と接続する。標高は約42.3～44.1mで、北西側から南東側にゆるやかに傾斜する。調査区内で南北約10m、東西約21m以上を確認し、調査区南側と東側にのびる。整地層は平坦面のおよそ全域で確認された。長さ22m以上、幅5～10m、厚さは最大で1.4mである。南側に位置する平場との比高差は約2.8mである。曲輪1切岸及び堀切1の掘削土を用い、標高の低い南側から西側にかけて明黄褐色粘土質シルト、暗褐色シルト、にぶい黄褐色砂などにより断面三角形状の整地が行われ、平坦面を造成している。整地は標高の高い東側と北西側から標高の低い南西側方向に行われている。堀切1 A段階で規模が判明する地点での幅は8.52mである。堀切1 B、Cの掘りなおしに際し、堀切1 Aはにぶい黄橙色砂、堀切1 Bはにぶい黄橙色シルト質粘土、にぶい黄色シルトにより整地が行なわれる。堀切1 B段階では北に約1.5～3.3m、堀切1 C段階では北に約1.4～1.6m拡張され、平場1 Cの幅は約10.7mとなる。

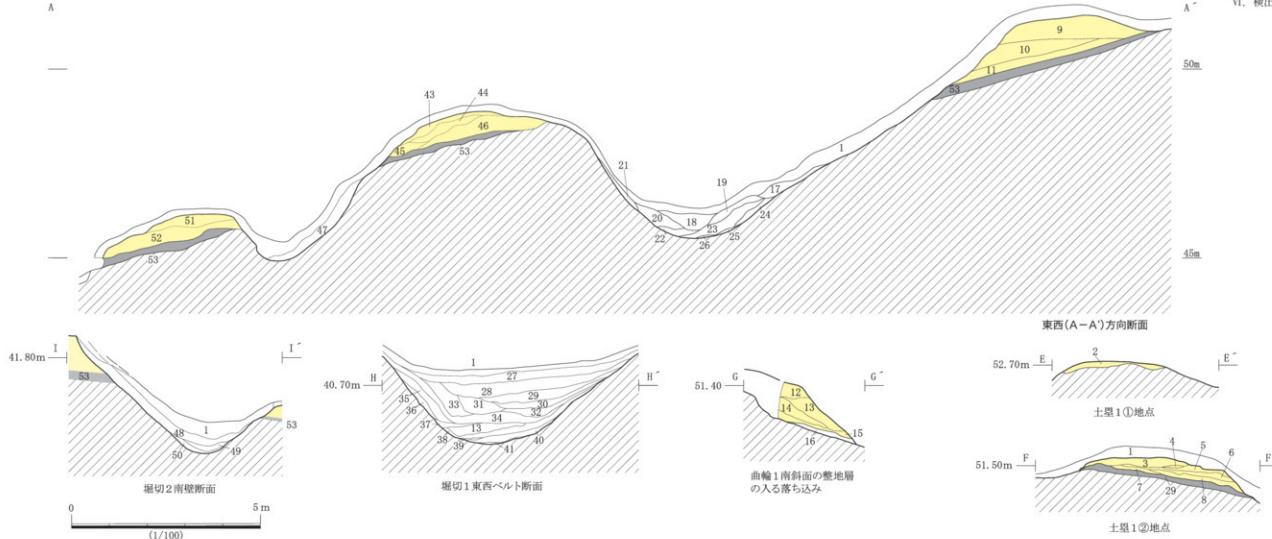
遺物は表土より古銭（永樂通宝）、石製品、近代以降の磁器碗、皿、蓋、堀切1 A整地層より銅製品が出土している。



第6図 調査地点測量図



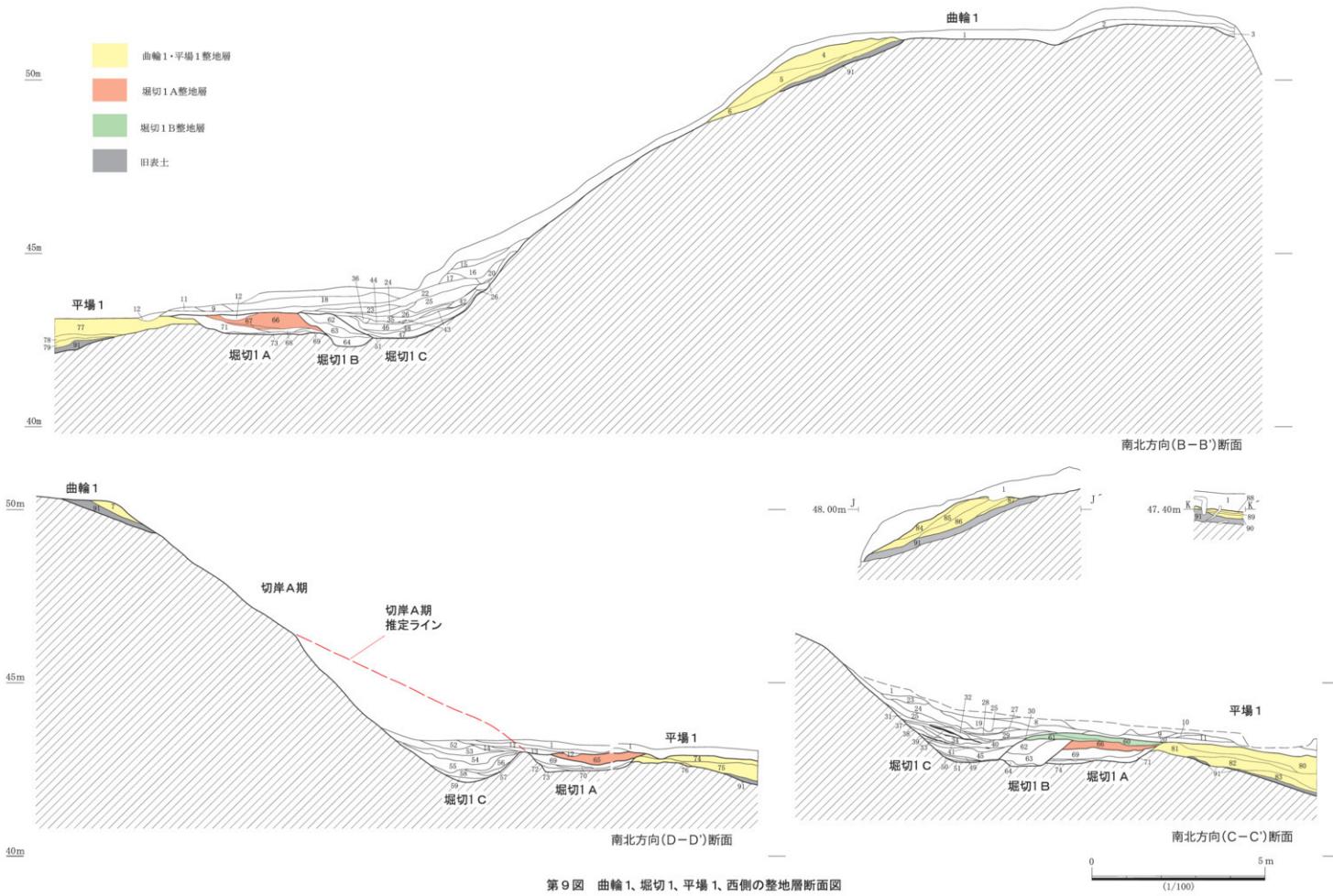
第7図 調査区平面図



解	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄色	2.5Y6/3	シルト	
2	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	黄褐色土を多く、黒色土粒を若干含む。
3	にぶい黄色	10YR5/3	砂	黒色土、黄褐色土を多く含む。炭化物をまばらに含む。
4	にぶい黄色	10YR5/3	砂	浅黄色土ブロックを含む。
5	にぶい黄色	10YR5/3	砂	黒色土、黄褐色土を多く含む。炭化物をまばらに含む。
6	浅黄色	2.5Y7/4	砂	
7	浅黄色	2.5Y7/3	シルト	黒色土粒を斑状に含む。
8	浅黄色	2.5Y7/4	砂	
9	黄褐色	2.5Y5/3	砂	黒褐色土を編状に含む。
10	にぶい黄色	2.5Y6/4	砂	
11	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	
12	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂	黒褐色砂、暗褐色砂質シルトを含む。
13	明黄褐色	2.5Y7/6	砂	暗褐色砂質シルト、黃色砂をブロック状に含む。
14	にぶい黄褐色	10YR7/4	砂	黒褐色土、暗褐色土を含む。
15	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂	黃褐色砂ブロック、暗褐色土、炭化物を含む。
16	明黄褐色	10YR7/6	砂質シルト	灰黃褐色砂質シルト、黑褐色砂質シルトを含む。硬くしまる。
17	明黄褐色	10YR6/6	砂質シルト	
18	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	黄褐色土小ブロックを多く含む。
19	にぶい黄褐色	10YR7/3	シルト	黄褐色土粒を若干含む。
20	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
21	黄褐色	10YR5/8	シルト	にぶい黄色砂ブロックを多く含む。
22	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	
23	褐色	10YR4/4	シルト	黄褐色土粒を多く、炭化物を若干含む。
24	褐色	10YR4/4	シルト	黄褐色土粒を若干含む。
25	明黄褐色	10YR7/6	砂	
26	褐色	10YR4/4	シルト	

解	土色	土性	含有物など	備考
27	稍黃灰色	2.5Y5/2	砂質粘土	黒色土粒を若干含む。
28	黃褐色	2.5Y5/4	砂	
29	黒褐色	10YR2/2	粘土	黒褐色土を編状に含む。
30	黃褐色	2.5Y5/4	砂	黃褐色砂を編状に含む。
31	褐色	10YR5/1	シルト質粘土	
32	黒褐色	10YR1/7/1	粘土	炭化物を微量含む。
33	黒褐色	10YR2/2	粘土	
34	にぶい黄褐色	10YR7/3	粘土	
35	黒褐色	10YR2/2	粘土	小礫、黄褐色土をまばらに含む。
36	褐灰色	10YR5/1	シルト質粘土	小礫、炭化物をわずかに含む。
37	褐色	2.5Y5/2	砂	
38	黒褐色	10YR3/1	砂質粘土	小礫をやや多く含む。炭化物粒を若干含む。
39	黃褐色	2.5Y5/4	砂	
40	にぶい黄褐色	10YR7/3	粘土	
41	黒褐色	10YR3/1	砂質粘土	地山小ブロック（崖岸岩鉱脈）をまばらに、黒色土小ブロック、小礫を斑状に若干含む。
42	黒褐色	2.5Y3/1	砂	小礫を若干含む。
43	灰褐色	10YR5/2	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロックをまばらに含む。
44	灰褐色	10YR4/2	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロック、黒色土粒を多く含む。
45	灰褐色	10YR4/2	粘土質シルト	
46	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	黄褐色粘土上、黒色土を斑状に含む。炭化物粒を若干含む。
47	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	細かい堆積山砂を若干含む。
48	灰褐色	10YR4/3	砂	にぶい黄褐色粘土ブロック、黃褐色土ブロックをまばらに含む黒褐色粘土を含む。平場1崩壊土。
49	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	細かい堆積山砂を若干含む。
50	黃褐色	2.5Y5/3	砂	黒褐色土、黃褐色土をまばらに含む。
51	灰褐色	2.5Y7/2	砂	
52	にぶい黄褐色	10YR6/4	シルト	黄褐色土、黒色土小ブロックを斑状に若干含む。
53	黒褐色	10YR5/2	粘土質シルト	旧表土。

第8図 土塁1、堀切1、土塁2、堀切2、土塁3断面



層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色(10YR3/2)～にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土質シルト～ 砂	木の根多い	
2	にぶい黄褐色 2.5Y6/3	砂	灰白色粘土ブロックを多く含む。	
3	灰白 2.5Y7/1	砂	やわい	
4	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂	黑色土、黄褐色土を多く含む。炭化物含む。	
5	淡褐色 2.5Y7/4	砂		
6	淡褐色 2.5Y7/4	砂	黄褐色砂を細状に含む。黄褐色砂ブロックを多く含む。	
7	明るい黄褐色 10YR6/6	砂質シルト	黄褐色砂をブロック、暗褐色土ハーブロックをまばらに含む。	
8	淡褐色 10YR2/2	粘土質シルト	淡黄色粘土を斑状に、褐灰色粘土ハーブロックを斑状に若干含む。	曲輪1 無地
9	灰褐色 10YR4/2	粘土質シルト	黄褐色粘土粒、黄褐色粘土ブロックを多く含む。	
10	黑褐色 10YR2/1	粘土		
11	浅褐色 2.5Y7/2	シルト	黄褐色粘土ハーブロック、炭化物を若干含む。	
12	灰褐色 3YR4/2	シルト	上部に山紋状若干含む。黄褐色粘土を含む。地山を含む。	
13	淡褐色 2.5Y6/2	細砂	小礫を多く含む。	
14	淡褐色 10YR4/2	粘土	黄褐色砂を斑状に、黄褐色粘土をまばらに含む。	
15	淡褐色 10YR4/1	砂	地山をハーブロックを多く含む。	
16	にぶい黄褐色 10YR7/4	粘土	灰褐色砂を細状に多く含む。	
17	灰褐色 10YR5/2	シルト	地山ハーブロックを斑状多く含む。	
18	灰褐色 10YR6/2	砂	黒色土ハーブロック、小礫を斑状に含む。下部に黒色土を細状に含む。	
19	黑褐色 10YR2/2	粘土質シルト	地山ハーブロックをまばらに含む。	
20	にぶい黄褐色 10YR4/2	粘土		
21	灰褐色 10YR5/2	砂	地山ハーブロックを含む。	
22	淡褐色 10YR3/1	粘土質シルト	地山ハーブロックを斑状に含む。	
23	淡褐色 10YR3/1	粘土質シルト	地山ハーブロック色やや多く含む。	
24	淡褐色 10YR3/1	粘土質シルト		
25	淡褐色 10YR2/2	粘土質シルト	後黄色粘土を斑状に、黒褐色粘土ハーブロックを斑状に若干含む。	
26	淡褐色 2.5Y7/4	粗砂	褐灰色粘土を細状に含む。	
27	灰褐色 10YR4/2	粘土		
28	灰褐色 10YR4/2	シルト	硬い。	
29	灰褐色 10YR4/2	粘土質シルト	黄褐色粘土粒、黄褐色粘土ブロックを多く含む。	
30	淡褐色 10YR2/2	粘土質シルト		
31	淡褐色 10YR4/1	砂	地山粒を若干含む。	
32	淡褐色 10YR3/1	粘土質シルト	地山粒をハーブロックを含む。下部に炭化物を斑状に含む。	
33	淡褐色 10YR3/1	粘土質シルト	地山粒を斑状に多く含み。黄褐色粘土をまばらに含む。下部に炭化物を含む。	
34	淡褐色 2.5Y7/3	砂	炭化物を微量含む。	
35	淡褐色 10YR2/2	粘土質シルト	地山粒を斑状やや多く含み。炭化物を斑状に含む。	
36	にぶい黄褐色 10YR6/2	シルト	黒褐色土を斑状に含む。	
37	淡褐色 10YR2/1	粘土質シルト	地山粒、地山ハーブロックをまばらに含む。	
38	にぶい黄褐色 2.5Y6/3	シルト	地山粒、地山ハーブロックを若干含む。	
39	にぶい黄褐色 2.5Y6/3	シルト	地褐色粘土質シルト、黄褐色土ハーブロック、炭化物を斑状に含む。	
40	灰褐色 10YR4/2	粘土質シルト		
41	淡褐色 10YR3/1	粘土質シルト	細かい山紋状若干含む。	
42	淡褐色 10YR4/2	粘土質シルト	にぶい黄褐色を含む。下部に炭化物帶。	
43	淡褐色 10YR3/2	粘土質シルト	地山粒をハーブロックを斑状に多く含む。	
44	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂	炭化物を若干含む。黒褐色土ハーブロックを若干含む。	
45	にぶい黄褐色 10YR6/3	シルト	炭化物、黄褐色土粒をまばらに含む。	
46	淡褐色 10YR2/2	砂	細かい山紋状。地山ハーブロックを多く含む。	
47	淡褐色 10YR2/1	粘土質シルト	地山小ハーブロック、地山プロックを多く含む。	
48	灰褐色 10YR4/2	粘土質シルト		
49	淡褐色 10YR2/1	砂		
50	淡褐色 10YR5/2	シルト		
51	にぶい黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	灰褐色粘土粒を若干含む。	
52	にぶい黄褐色 2.5Y6/1	粗砂	にぶい黄褐色を含む。下部に炭化物帶。	
53	淡褐色 2.5Y5/3	粗砂	地山粒をプロックを斑状に多く含む。	
54	灰褐色 10YR4/2	砂	黄褐色粘土ブロックを多く含む。炭化物を若干含む。	
55	にぶい黄褐色 2.5Y6/3	粗砂		
56	淡褐色 2.5Y7/4	粗砂	純灰褐色粘土を斑状に含む。	
57	暗褐色 2.5Y5/2	粗砂	黄褐色粘土をまばらに含む。	
58	にぶい黄褐色10YR6/2シルト	にぶい黄褐色10YR7/2粘土を斑状に互層に含む。		
59	淡褐色 2.5Y6/2	粘土		
60	淡褐色 10YR2/1	粘土質シルト	黄褐色粘土粒、黄褐色土粒を若干含む。	掘切1 C
61	にぶい黄褐色 2.5Y6/4	シルト	地山ハーブロックを斑状に多く含む。	
62	淡褐色 2.5Y7/4	粗砂	地山粘土を斑状に含む。	
63	にぶい黄褐色10YR6/2シルト	にぶい黄褐色10YR7/2粘土を斑状に互層に含む。		掘切1 B
64	にぶい黄褐色 10YR7/2	粘土		
65	にぶい黄褐色 10YR7/4	粘土	白色粘土粒、黑色土粒、礫を含む	
66	にぶい黄褐色 10YR6/3	砂	黄褐色粘土ハーブロックをまばらに、黒褐色色を斑状に多く含む。	
67	灰褐色 10YR5/2	粘土質シルト	黒褐色粘土をまばらに、黄褐色粘土ハーブロックを斑状に多く含む。	
68	にぶい黄褐色 10YR6/2	シルト	灰褐色シルトを斑状に含む。	
69	淡褐色 10YR4/1	砂質粘土	炭化物を微量含む。	
70	淡褐色 10YR4/1	砂		
71	にぶい黄褐色 2.5Y6/5	砂	黄褐色粘土ブロックを斑状に多く含む。	
72	にぶい黄褐色 10YR6/4	砂質粘土		
73	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂	灰白色粘土を斑状に含む。	
74	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂	暗褐色粘土ハーブロック、黄褐色色、黄褐色粘土ブロック、炭化物を含む。	
75	淡褐色 10YR5/8	粘土質シルト	にぶい黄褐色砂、暗褐色シルトハーブロック、炭化物を含む。	
76	暗褐色 10YR4/4	粘土質シルト	黄褐色粘土ハーブロックを含む。	
77	明るい黄褐色 10YR6/6	粘土質シルト	にぶい黄褐色砂、炭化物を含む。	
78	淡褐色 10YR6/6	シルト	明るい黄褐色砂、炭化物を含む。炭化物を含む。	
79	淡褐色 10YR6/6	粘土質シルト	暗褐色粘土ハーブロック、にぶい黄褐色砂、炭化物を含む。	
80	にぶい黄褐色 10YR6/3	砂	黄褐色粘土、黑色シルト、灰白色シルトブロック、黑色土粒、小礫を多く含む。	
81	灰褐色 10YR5/2	粘土質シルト	黄褐色粘土ハーブロック、黑色土粒を含む。	
82	にぶい黄褐色 10YR7/3	シルトプロック	主として灰褐色粘土質シルトを斑状に含む。	
83	灰褐色 10YR4/2	粘土質シルト	黄褐色粘土ハーブロックをやや多く含む。	
84	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	炭化物を含む。滌出土・焼帯。	
85	暗褐色 10YR5/8	シルト	炭化物、黄褐色ハーブロック、褐色土を含む。	
86	にぶい黄褐色 10YR6/4	砂質シルト	炭化物、黄褐色ハーブロック、画面色土ハーブロックを含む。	
87	淡褐色 2.5Y6/5	シルト	炭化物、黃褐色砂、黑色シルト、褐色土粒を含む。	
88	灰褐色 2.5Y6/5	シルト	「白色」シルトハーブロックを含む。	
89	淡褐色 10YR2/3	粘土	白色粘土ハーブロックを若干含む。滌出土・焼帯。	
90	灰褐色 2.5Y6/2	シルト	白色粘土ハーブロック、黄褐色粘土ハーブロック、褐色粘土ハーブロックを若干含む。	
91	淡褐色 10YR3/2	粘土質シルト		田表土

第3表 曲輪1、堀切1、1平場1、西側の整地断面

【土壘 1】

曲輪 1 の西側に位置する。標高51.0～52.8mである。長さ7.3m、幅2.9m、堀切 1 底面からの高さは6～7.5mである。土壘 1 の東側は地山の削り出しを行い、西側はにぶい黄褐色砂、浅黄色砂、灰黃褐色シルトにより断面台形状の盛土が行われる。厚さは0.6mである。

遺物は出土していない。

【土壘 2】

曲輪 1 の西側、堀切 1 と堀切 2 にはさまれた地点に位置する。最も高い地点の標高は50.6m、南側の標高は44.1mである。長さ20m以上、幅5m、堀切 2 底面から高さは2.5～3mである。土壘 2 は調査区北側にのびる。土壘 2 北側は地山の削り出しており、頂上部から西側は旧表土上に灰黄褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルトにより断面三角形状の盛土が行われる。厚さは0.6～1mである。

遺物は須恵器高台付坏、鉄滓、剥片が出土している。

【土壘 3】

曲輪 1 の西側、堀切 2 の西側に位置する南北にのびる土壘である。標高は北端で46.9m、南側で42.9mである。堀切 2 西側の整地層の南東端より土壘 3 は始まる。調査区内で長さ18m以上、幅2.9mが確認された。土壘 3 は調査区の南側にのびると考えられる。西側の地山面からの高さは1.7mである。旧表土上に灰黄色砂、にぶい黄橙色シルトにより断面台形状の盛土が行われる。厚さは1mである。

遺物は出土していない。

【西側の整地層】

曲輪 1 の西側、堀切 2 の西側に位置する。南側に傾斜する緩斜面の旧表土上に地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトや明黄褐色砂質シルトにより断面三角形状の整地を行い、平坦面と切岸を造成するとともに土壘 3 も同時に構築される。調査区内で長さ約3m、幅2mが確認された。南側の地山面との比高差は約1.5mである。また、平成17年度調査区 4 トレンチでも旧表土上に地山ブロックを含む灰黄褐色シルトと黒褐色粘土による整地層が確認されていることから、西側にさらにのびると考えられる。このことから長さ17m以上が確認されたことになる。整地層の厚さは事前調査区内で約0.70m、17年度調査区では厚さ0.10～0.20mである。

遺物は出土していない。

【堀切 1】

曲輪 1 と土壘 2 及び平場 1 にはさまれた地点に位置する。北側から南側に南北方向にのび、土壘 2 南端付近で東西方向に向きを換え、東西方向にのびる。調査区内で確認された長さは南北26m以上、東西13.4m以上である。堆積土の観察や曲輪 1 切岸の傾斜変換点から 3 時期の変遷（A→C）がある。曲輪 1 南側の切岸では中程で傾斜が変わり、変曲点上方の傾斜の緩い部分が堀切 1 A 期、下方の傾斜

の急な部分が堀切 1 B・C 期に対応すると考えられる。最も古い A 期溝の芯々の位置を 2.5m 北側に移し、B・C 期が掘削される。この際、土塁 2 付近や平場 1 北側付近の堀切 1 A、B 期部分が整地される。上幅は最も新しい C 期で 6.9m、B 期では 2.2m 以上、最も古い A 期で 2.8m 以上である。深さは C 期に対応する切岸傾斜変換点より計測すると 1.9~3.8m である。断面は南北方向で U 字形、東西方向で A 期が箱形、C 期で U 字形であり、B 期は残存状況から U 字形と考えられる。堆積土は A 期ではにぶい黄色砂、B 期では浅黄色砂、暗灰黄色砂、灰黄色粘土による自然堆積の後、整地が行なわれ、平場 1 は北側に拡張されている。C 期ではにぶい黄色砂、灰黄色砂、黒褐色粘土が自然堆積しており、切岸の崩壊土とみられる地山ブロックや炭化物を縞状に含んでいる。

遺物は堀切 1 C 堆積土より土師質土器皿、鉄製品が出土している。

【堀切 2】

土塁 2、平場 1 と土塁 3 にはさまれた地点に位置する南北方向の堀切である。調査区内で長さ約 18m が確認され、北側と南側にさらにつづくものと考えられる。上幅 5m、深さは土塁 2 上より 2~3.8m であり、平場 1 との比高差は 3.25m である。断面は U 字形である。堆積土は標高の低い南側に向かうほど厚い。黒褐色土を主体とし、整地層崩壊土を含む。自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

(2) 曲輪 1 上で検出した遺構

曲輪 1 では建物跡 12 棟、柱列 3 条、土坑 12 基（このうち鍛冶炉 1 基、焼成遺構 1 基）、溝跡 3 条、組み合わないピット 40 基が確認された。

①建物跡

【SB1建物跡】

曲輪 1 地山面で確認された桁行 2 間、梁行 1 間の南北棟である。直接の重複関係はないが、SK34、SB2 とは位置が重複する。建物総長は桁行が東側柱列で 3.77m、柱間寸法は北より 1.88m、1.89m、北妻で 3.13m である。方向は西側柱列で計測すると N-2° -E である。柱穴は 6ヶ所で確認された。平面形は隅丸長方形、円形、梢円形であり、長軸 0.24~0.40m、短軸 0.20~0.36m、深さは 0.31~0.79m である。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は 6ヶ所で確認された。径 0.11~0.23m である。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB2建物跡】

曲輪 1 地山面で確認された桁行 1 間、梁行 1 間の南北棟である。直接の重複関係はないが、SK19、SK31、SB1 とは位置が重複する。建物総長は桁行が西側柱列で 3.88m、北妻で 3.27m である。方向は西側柱列で計測すると N-39° -W である。柱穴は 4ヶ所で確認された。平面形は隅丸長方形から梢円

形で、長軸0.17～0.38m、短軸0.17～0.34m、深さは0.34～0.48mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、径0.12～0.17mである。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB 3 建物跡】

曲輪1地山面で確認された桁行1間、梁行1間の南北棟である。直接の重複関係はないが、SB 4と位置が重複する。建物総長は桁行が西側柱列で3.16m、南妻で2.04mである。方向は西側柱列で計測するとN-22° -Eである。柱穴は4ヶ所で確認された。平面形は隅丸長方形から梢円形のもので、長軸0.26～0.64m、短軸0.21～0.44mであり、P3は他の柱穴と比較して小型である。深さは0.41～0.58mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認された。径0.06～0.20mである。抜き取り痕跡は1ヶ所で確認された。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB 4 建物跡】

曲輪1で確認された桁行2間、梁行2間の東西棟である。SK31、SK30、SK19より新しく、SD36より古い。建物総長は桁行が北側柱列で5.49m、柱間寸法は西より3.05m、2.44m、西妻が4.34m、柱間寸法は北より2.18m、2.16mである。方向は西側柱列で計測するとN-12° -Eである。柱穴は8ヶ所で確認された。平面形は隅丸長方形から円形であり、長軸0.33～0.48m、短軸0.27～0.35m、深さは0.22～0.70mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は7ヶ所で確認され、径0.09～0.23mである。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB 5 建物跡】

曲輪1で確認された桁行1間、梁行1間の東西棟である。SK31より新しく、SK24、SK19より古い。SK30と重複するが、新旧関係は捉えられなかった。また、SK20、SK23、SD35、SD36、SB6、SB9とは位置が重複する。建物総長は桁行が南側柱列で4.39m、西妻で3.09mである。方向は西側柱列で計測するとN-14° -Wである。柱穴は4ヶ所で確認された。平面形は、長軸0.28～0.50m、短軸0.25～0.28m、深さは0.26～0.49mである、埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、径0.12～0.21mである。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB 6 建物跡】

曲輪1で確認された桁行1間、梁行1間の東西棟である。SK31、SK30、SK19より新しく、SD35より古い。建物総長は桁行が南側柱列で3.43m、西妻で2.55mである。方向は西側柱列で計測すると

N-17° -Eである。柱穴は4ヶ所で確認された。平面形は梢円形から隅丸方形であり、長軸0.33～0.42m、短軸0.25～0.36m、深さは0.28～0.48mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径0.13～0.22mである。抜き取り痕跡は1ヶ所で確認された。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB 7 建物跡】

曲輪1地山面で確認された桁行1間、梁行1間の東西棟である。重複はない。建物総長は桁行が南側柱列で1.93m、西妻で1.64mである。平面形はやや歪む。方向は西側柱列で計測するとN-26° -Wである。柱穴は4ヶ所で確認された。平面形は隅丸方形で、一辺0.18～0.33m、深さは0.24～0.34mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、径0.12～0.17mである。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB 8 建物跡】

曲輪1で確認された桁行1間、梁行1間の南北棟である。SK20、SK21より新しい。SK33とは位置が重複する。建物総長は桁行が西柱列で2.70mである。北妻で2.47mである。平面形は歪む。方向は西側柱列で計測するとN-24° -Wである。柱穴は4ヶ所で確認された。平面形は隅丸方形から円形、長軸0.25～0.41m、短軸0.16～0.27m、深さは0.28～0.40mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認された。径0.10～0.12mである。抜き取り痕跡は1ヶ所で確認された。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB 9 建物跡】

曲輪1で確認された桁行1間、梁行1間の建物である。SK30、SK20より新しく、SK21より古い。建物総長は西側柱列で2.58m、北側柱列は2.58mである。方向は西側柱列で計測するとN-11° -Wである。柱穴は4ヶ所で確認された。平面形は隅丸方形から円形で、長軸0.36～0.45m、短軸0.36～0.41m、深さは0.28～0.40mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認された。径0.11～0.20mである。抜き取り痕跡は1ヶ所で確認された。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB10建物跡】

曲輪1地山面で確認された南北方向にのびる2間以上の建物であり、調査区の東側につづくと考えられる。SB11とは位置が重複する。建物総長は2.59m、柱間寸法は北より1.32m、1.27mである。方向はN-22° -Wである。柱穴は3ヶ所で確認された。平面形は梢円形から隅丸長方形のもので、長軸0.

VI. 検出された遺構と遺物

28~0.49m、短軸0.21~0.34m、深さは0.30~0.61mである。埋土は風化岩片を含む褐色砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径0.12~0.22mである。堆積土は風化岩片を含む褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB11建物跡】

曲輪1地山面で確認された南北方向にのびる1間以上の建物であり、調査区の東側につづくと考えられる。SB10と位置が重複する。建物総長は西柱列で2.72mである。方向はN-20° -Wである。柱穴は2ヶ所で確認された。平面形は隅丸方形、楕円形であり、一辺0.29~0.35m、深さは0.36~0.71mである。埋土は風化岩片を含む褐色砂である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径0.10~0.14mである。堆積土は風化岩片を含む褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SB38建物跡】

曲輪1で確認された桁行1間、梁行1間の南北棟である。SK30、SK20より新しく、SK18より古い。また、SK22と位置が重複する。建物総長は桁行が西側柱列で3.19m、南妻で1.99mである。方向は西側柱列で計測するとN-19° -Eである。柱穴は4ヶ所で確認された。平面形は隅丸長方形から楕円形のもので、長軸0.15~0.33m、短軸0.13~0.25m、深さは0.21~0.34mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認された。径0.07~0.13mである。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

②柱列跡

【SA15柱列跡】

曲輪1地山面で確認された東西方向にのびる2間の柱列である。重複関係はない。総長は4.46m、柱間寸法は西より2.29m、2.17mである。方向はE -3° - Nである。柱穴は3ヶ所で確認された。平面形は隅丸方形、円形であり、一辺0.33~0.40m、深さは0.56~0.75mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径0.11~0.13mである。抜き取り痕跡は1ヶ所確認された。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

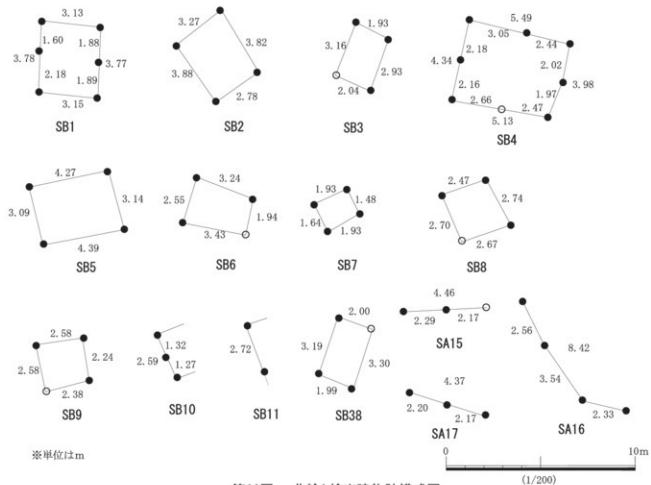
遺物は出土していない。

【SA16柱列跡】

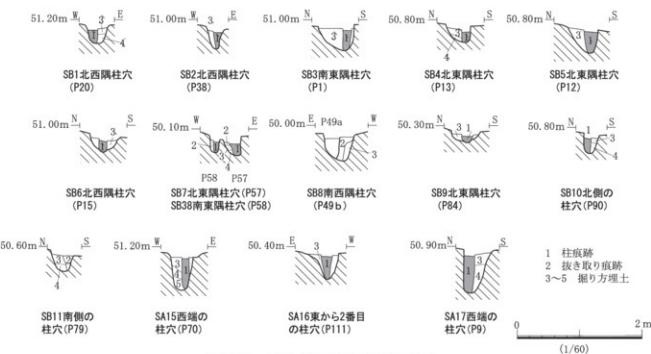
曲輪1の南西隅付近、地山面及び整地層及び旧表土上で確認された3間の柱列である。整地層に沿うように造営されている。総長は8.82m、柱間寸法は西より2.56m、3.54m、2.33mである。方向はN-31° -Wである。柱穴は4ヶ所で確認された。平面形は隅丸方形、楕円形であり、一辺0.24~0.41m、深さは0.28~0.46mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径



第10図 曲輪1建物跡



第11図 曲輪1検出建物跡模式図



第12図 曲輪1検出建物跡柱穴断面

No.	柱			板			縄			備考	遺構	No.	柱			板			備考		
	平面形	長幅	短幅	埋込	理土	平面形	長幅	短幅	埋込	理土			平面形	長幅	短幅	埋込	理土				
P19	楕丸方陣	32.2	24.4	31	A1	円形	11.4	11.1	あ			SII	楕丸方陣	45.7	33.9	22	A2	円形	11.6	9.7	あ
P20	円形	40.6	36.5	32	A2	円形	12.4	11.3	あ		P19		円形	25.7	27.9	44	A1, A2	円形	15.4	14.0	あ
P21	楕円形	46.2	30.1	57	A2	楕丸形	17.1	16.5	あ		P21		—	—	—	—	—	—	—	—	
P25	楕丸方陣	39.7	32.6	79	A1, A2	楕円形	17.0	17.3	あ		P17		—	—	—	—	—	—	—	—	
P27	楕丸方陣	24.7	20.7	39	A1, A2	円形	11.0	10.6	あ		P18		円形	18.3	16.6	27	A1	—	—	—	—
P40	円形	25.9	23.6	36	A1, A2	円形	11.6	11.1	あ		P22	SII	円形	43.0	40.4	46	A2	楕円形	12.9	9.3	あ
P28	楕円形	34.4	25.6	38	A2	円形	12.9	12.8	あ	抜き	P23		楕丸方陣	30.0	24.2	36	A2	楕円形	15.9	13.4	あ
P64	楕丸方陣	30.4	17.4	39	A1, A2	円形	11.0	12.8	あ		P24		楕円形	25.1	22.3	9	A3	—	—	—	—
P76	楕丸方陣	22.3	17.8	34	A1, A2	楕円形	13.6	9.4	あ		P27		楕丸方陣	36.7	28.0	45	—	—	—	—	—
P211	楕円形	38.4	31.9	48	A1	円形	17.2	16.5	あ		P28		楕円形	30.3	26.8	26	A1, A2	楕円形	14.6	12.6	あ
P3	楕円形	52.4	44.1	43	A1	円形	9.9	9.2	あ		P29	SII	楕丸方陣	25.4	16.3	14	A1	—	—	—	—
P3	楕丸方陣	26.5	21.8	58	A1, A2	円形	6.2	6.1	あ		P30		楕丸方陣	25.6	21.6	36	A1, A2	円形	7.7	6.3	あ
P92	楕丸方陣	64.2	38.7	48	A2, A3	—	—	—	抜き?	P31	楕円形	25.9	19.9	23	A3	円形	33.1	30.3	—		
P103	楕丸方陣	58.4	45.9	44	A1, A2	円形	20.1	18.7	あ		P32	楕円形	25.3	15.1	20	A1	楕円形	17.6	15.9	あ	
P76	楕丸方陣	38.5	37.5	25	A1	円形	9.9	8.8	あ		P33	楕丸方陣	30.0	23.8	14	A3	楕円形	30.5	9.5	あ	
P10	円形	37.8	34.4	72	A1, A2	円形	19.7	17.1	あ		P34	楕丸方陣	30.6	25.0	30	A1	—	—	SK19-P24	—	
P13	楕丸方陣	36.5	33.6	31	NO, SI	円形	12.6	12.3	い		P35	楕円形	17.2	16.7	30	A2	—	—	—	—	
P16	楕円形	33.6	27.1	35	A1	円形	9.0	7.9	あ		P36	SII	方盤	27.2	24.4	55	A1, A2	円形	11.2	10.1	あ
P29	楕丸方陣	37.6	30.3	55	A1, A2	円形	15.0	11.6	あ		P42		楕丸方陣	28.9	24.3	19	C	—	—	SK30-P42-S306	—
P83	楕丸方陣	45.6	34.9	70	A1, A2	楕円形	23.8	21.7	あ	抜き	P43		楕円形	30.2	17.7	26	A1	—	—	SK30-2り引?	—
P106	円形	33.3	26.8	22	A2	—	—	—	SK19-P106-S306	P47	—	—	—	—	—	—	—	—			
P130	円形	34.0	33.0	22	A2, A3	円形	10.5	8.8	あ	SK30-2り引?	P50	—	—	—	—	—	—	—	—		
P12	楕丸方陣	50.4	46.8	49	A1	円形	21.3	18.9	あ		P51	SII	楕円形	37.7	36.1	16	A2	—	—	—	—
P14	円形	28.6	26.0	42	A1	楕円形	12.4	10.8	あ	SK31-P124-S324	P52		楕丸方陣	28.6	13.5	48	A2	—	—	—	—
P26	楕丸方陣	31.1	28.9	34	A2	円形	13.3	12.7	あ	抜き?	P53		楕円形	18.9	16.9	11	D	—	—	—	—
P31	楕円形	38.5	25.7	26	A1	円形	15.2	8.8	あ	SK30-2り引?	P54		—	—	—	—	—	—	—	—	
P15	楕円形	42.2	36.1	34	A2	円形	12.9	11.9	あ		P55		—	—	—	—	—	—	—	—	
P41	楕丸方陣	43.1	36.0	28	A2	楕丸方陣	22.3	13.3	あ	SK30-P41-S335	P56	SII	円形	37.7	36.1	16	A2	—	—	—	—
P45	楕円形	33.1	28.6	48	A1, A2	円形	14.0	12.4	あ	SK31-2り引?	P57		楕丸方陣	28.6	13.5	48	A2	—	—	—	—
P80	楕円形	37.1	25.5	46	A1	楕円形	26.4	17.0	あ	抜き?	P58		楕円形	19.9	16.9	11	D	—	—	—	—
P52	楕丸方陣	25.9	18.2	34	A1, A2	円形	12.6	10.7	あ		P63		—	—	—	—	—	—	—	—	
P53	楕丸方陣	28.7	30.3	32	A1	楕円形	17.0	14.7	あ		P66		円形	19.2	17.3	8	楕円形	32.5	20.4	—	—
P56	楕丸方陣	28.5	23.5	24	A1	円形	13.4	12.6	あ		P67	SII	円形	27.2	23.2	8	楕円形	32.5	20.4	あ	P49a-P49b
P57	楕丸方陣	27.7	22.0	32	A2, A3	楕円形	16.5	13.7	あ		P68		—	—	—	—	—	—	—	—	
P46	楕丸方陣	25.7	16.6	38	A1	円形	9.7	7.9	あ	SK30-2り引?	P69		—	—	—	—	—	—	—	—	
P49	円形	37.5	27.7	40	A1	—	—	—	SK30-2り引?	P71	—	—	—	—	—	—	—	—			
P102	楕円形	29.3	25.8	29	A1	円形	12.0	8.0	あ	SK31, 30, 30-P102	P72	—	—	—	—	—	—	—	—		
P104	楕円形	41.9	24.4	28	B1	円形	10.0	9.5	い	SK30-P104	P73	SII	楕丸方陣	30.6	25.1	19	A1	—	—	—	—
P44	左形	36.1	34.8	56	A1, A2	楕丸方陣	44.6	36.5	あ	抜き?	P74		楕円形	32.9	20.5	17	A1	—	—	SK19-P77	—
P84	円形	45.7	41.5	36	A1, A2	円形	11.4	9.5	あ	SK30-SK21	P75		—	—	—	—	—	—	—	—	
P105	楕丸方陣	39.2	36.3	59	A2	円形	14.5	13.7	い	SK21, SK20-P105	P76		—	—	—	—	—	—	—	—	
P14	円形	30.4	26.8	30	B1, B2	円形	14.7	14.8	い		P77		楕丸方陣	32.7	23.5	16	A2	—	—	—	—
P287	楕丸方陣	40.3	34.3	61	B2, B1, B2	楕円形	22.0	16.4	い		P78	SII	円形	35.7	25.6	27	A1	楕円形	9.7	6.8	あ
P290	楕丸方陣	28.3	23.5	36	B1	楕円形	12.1	10.2	い		P79		—	—	—	—	—	—	—	—	
P79	円形	36.5	35.9	36	B1	楕円形	13.1	9.8	い	抜き?	P80		楕円形	34.0	31.3	52	A1, A2	円形	14.0	12.0	あ
P136	楕円形	36.2	27.5	71	B1	楕丸方陣	10.1	2.7	あ	SK30-P5-P45	P81		楕丸方陣	25.7	23.5	16	A2	—	—	—	—
P55	楕円形	32.2	25.1	24	A1	楕円形	13.0	11.1	あ	SK30-P5-P45	P82		楕円形	34.9	31.2	33	A1	円形	9.4	8.5	あ
P72	楕丸方陣	40.3	18.0	67	A2, A1	楕丸方陣	38.0	38.0	あ		P83	SII	楕円形	27.0	23.7	10	A2	—	—	—	—
P70	円形	39.3	38.6	51	A2, A1	楕丸方陣	11.0	9.8	あ	2	P84		楕円形	34.0	31.3	52	A1, A2	円形	14.0	12.0	あ
P74	楕丸方陣	37.3	32.9	75	A2, A1	円形	13.0	10.9	あ	2	P85		楕丸方陣	28.8	25.1	31	A1, A2	円形	11.9	11.1	あ
P62	楕円形	31.3	25.5	28	A1, A2	楕丸方陣	12.7	11.8	あ		P86		楕丸方陣	48.4	44.3	34	A1	円形	15.7	15.0	あ
P111	楕円形	37.5	30.2	46	A1	円形	16.8	16.6	あ	曲輪1地盤	P87		—	—	—	—	—	—	—	—	
P133	楕丸方陣	41.2	37.0	45	A2, A1	円形	14.0	13.6	あ	SK30-P5-P13	P88	SII	楕円形	35.7	25.6	27	A1	楕円形	9.7	6.8	あ
P114	楕丸方陣	28.4	23.9	39	A1	円形	14.7	12.0	あ		P89		楕円形	45.6	33.0	46	A2	円形	12.9	11.7	あ
P9	楕丸方陣	41.9	36.0	72	A1, A2	楕円形	17.3	14.9	あ		P90		楕円形	41.4	44.3	30	A1	楕円形	12.0	10.0	あ
P96	円形	42.4	37.5	38	A1	楕円形	15.3	13.1	あ		P91		—	—	—	—	—	—	—	—	
P125	楕丸方陣	31.5	21.3	36	B2	楕円形	10.0	8.3	い		P92		—	—	—	—	—	—	—	—	
P4	楕円形	52.1	36.3	39	A1	楕円形	17.5	15.2	あ		P93	SII	—	—	—	—	—	—	—	—	
P94	楕円形	48.7	41.4	45	A1	楕円形	17.0	15.2	あ		P94		—	—	—	—	—	—	—	—	
P114	楕丸方陣	28.4	23.9	39	A1	円形	14.7	12.0	あ		P95		—	—	—	—	—	—	—	—	
P9	楕丸方陣	41.9	36.0	72	A1, A2	楕円形	17.3	14.9	あ		P96		—	—	—	—	—	—	—	—	
P96	円形	42.4	37.5	38	A1	楕円形	15.3	13.1	あ		P97		—	—	—	—	—	—	—	—	
P125	楕丸方陣	31.5	21.3	36	B2	楕円形	10.0	8.3	い		P98	SII	—	—	—	—	—	—	—	—	
P4	楕円形	52.1	36.3	39	A1	楕円形	17.5	15.2	あ		P99		—	—	—	—	—	—	—	—	
P114	楕丸方陣	28.4	23.9	39	A1	円形	14.7	12.0	あ		P100		—	—	—	—	—	—	—	—	
P9	楕丸方陣	41.9	36.0	72	A1, A2	楕円形	17.3	14.9	あ		P101		—	—	—	—	—	—	—	—	
P96	円形	42.4	37.5	38	A1	楕円形	15.3	13.1	あ		P102		—	—	—	—	—	—	—	—	
P125	楕丸方陣	31.5	21.3	36	B2	楕円形	10.0	8.3	い		P103	SII	—	—	—	—	—	—	—	—	
P4	楕円形	52.1	36.3	39	A1	楕円形	17.5	15.2	あ		P104		—	—	—	—					

0.13~0.17mである。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SA17柱列跡】

曲輪1地山面で確認された東西方向にのびる2間の柱列である。重複関係はないが、SB4、SB5と位置が重複する。総長は4.37m、柱間寸法は西より2.20m、2.17mである。方向はE -17° -Sである。柱穴は2ヶ所で確認された。平面形は隅丸方形、円形であり、一辺0.31~0.42m、深さは0.36~0.72mである。埋土は暗褐色砂を含む黄褐色砂や風化岩片を含む褐色砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径0.10~0.17mである。堆積土は黄褐色砂を含む暗褐色砂や風化岩片を含む褐色砂である。

遺物は出土していない。

③土坑

【SK18土坑】

曲輪1で検出された。SK31、SK30、SD36、SB38より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸1.11m、短軸1.07m、深さは0.25mである。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は黒褐色砂、にぶい黄褐色砂で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SK19土坑】

曲輪1で確認された。SK31、SB5、SK24より新しく、SD35、SD36より古い。平面形は不整形である。規模は長軸6.03m、短軸2.96m、深さは0.43mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は黄褐色砂を含む明黄褐色砂、にぶい黄褐色砂で、自然堆積と考えられる。

遺物は須恵器壺破片が1点出土している。

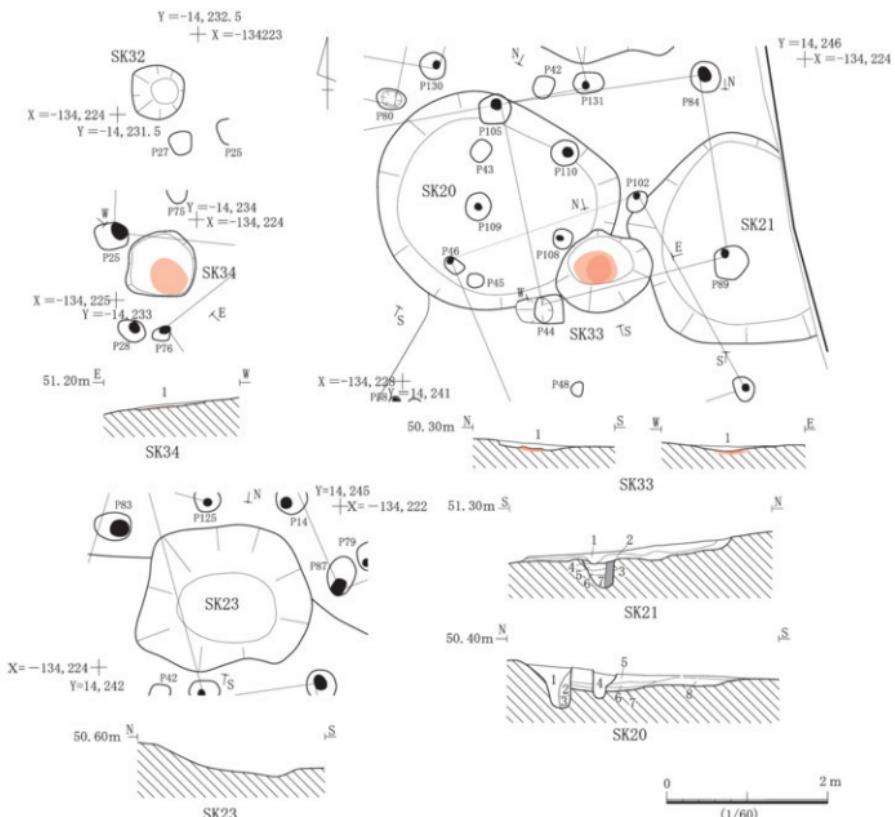
【SK20土坑】

曲輪1で確認された。SK30より新しく、SK33、SB8、SB9、SB38、SD36より古い。平面形は梢円形である。規模は長軸3.01m、短軸2.58m、深さは0.33mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は黄褐色砂を含むにぶい黄橙色砂や灰黄褐色砂を含む黒色砂で、人為堆積である。

遺物は砥石が1点出土している。

【SK21土坑】

曲輪1で確認された。SK30、SB9より新しく、SK33、SB8より古い。平面形は確認された範囲では梢円形で、遺構は調査区東側に続く。規模は長軸2.62m、短軸1.85m以上、深さは0.29mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は黄褐色砂を多く含む灰白色粘土ブロック、褐色砂を多く含む黒褐色砂で、人為堆積である。



SK20

種	土 色	土性	含有物など	備考
1	褐色	10YR4/6	砂 にぶい黄褐色砂ブロックを少量含む	P105 赤茶褐色
2	褐色	10YR4/4	砂 にぶい黄褐色砂ブロックを斑状に含む	P105 赤褐色
3	にぶい黄褐色	10YR6/4	砂 褐色砂ブロックを少額含む	P105 飴色
4	褐色	10YR6/6	砂 にぶい黄褐色砂ブロックを少量含む	P43
5	にぶい黄色	10YR6/4	砂 黄褐色砂ブロックを均一に含む。人為。	
6	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂 にぶい黄褐色砂ブロックを多量に含む。人為。	
7	黒色	10R1/2	砂 黄褐色砂ブロックを多量に含む。灰黒褐色。	
8	暗緑黄色	2.5Y8/2	砂 炭化物を含む。	

SK21

番号	土 色	土性	含有物など	備考
1	灰白色10YR7/2	粘土ブロックを極めて多く含み、間に黃色地色を多く含む	人為	
2	黑褐色10K3/2	砂 塗色ブロックを多く含む。	人為	
3	黃褐色10YR5/6	砂 しまりなし	P99 紅茶園	
4	暗褐色10YR3/4	砂 暗褐色を不均一に含む。		
5	褐色10YR4/4	砂 暗褐色を多く含む。		
6	暗褐色10YR4/2	砂 暗褐色を不均一に含む。	P99 振り園	
7	褐色10YR4/4	砂 暗褐色を不均一に含む。		

SK33

層	土色	土性	含有物など		備考
			量	種類	
1	黒褐色	10R2/3 シルト	褐色砂ブロックを少し含む。	底面の擦け面は2~3cmの厚さまで被熟しており、著しく赤変化する。	

SK23

層	土色	土性	含有物など	備考
I	褐色	砂	やわい。	

第13図 曲輪1土坑(1)

遺物は出土していない。

【SK22土坑】

曲輪1で確認された。SK30より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸1.24m、短軸0.79m、深さは0.12mである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は炭化物、黒褐色砂ブロックを多く含む黒色砂であり、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SK23土坑】

曲輪1で確認された。SK30より新しく、SD36より古い。平面形は梢円形である。規模は長軸2.04m、短軸1.88m、深さは0.42mである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は褐色砂で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SK24土坑】

曲輪1で確認された。SK31、SB5より新しく、SK19より古い。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸1.08m、短軸0.83m、深さは0.12mである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は黄褐色砂、黒色砂で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SK30土坑】

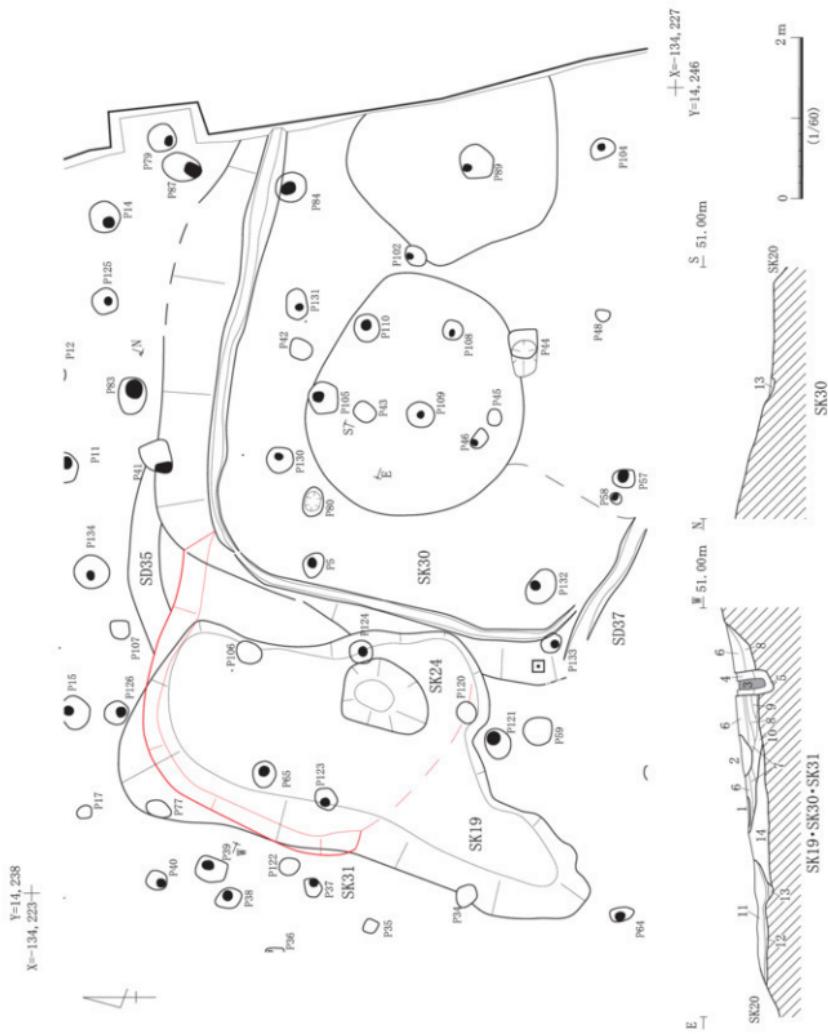
曲輪1で確認された。SK31より新しく、SK18、SK19、SK20、SK21、SK22、SK23、SK33、SD35、SD36、SB6、SB8、SB9、SB38より新しい。SB5と重複するが、新旧関係は捉えられなかった。平面形は隅丸長方形である。規模は東西7.30m以上、南北5.18m、深さは北側の地山面より0.52mである。底面はほぼ平坦で、壁は崩落のためゆるやかに立ち上がる。堆積土はにぶい黄褐色砂、灰黃褐色砂である。壁際で幅0.20m、深さ0.10mの周溝が確認された。底面は皿状で壁は急に立ち上がる。堆積土は灰黃褐色砂がラミナ状に堆積していることから、自然堆積である。

遺物は出土していない。

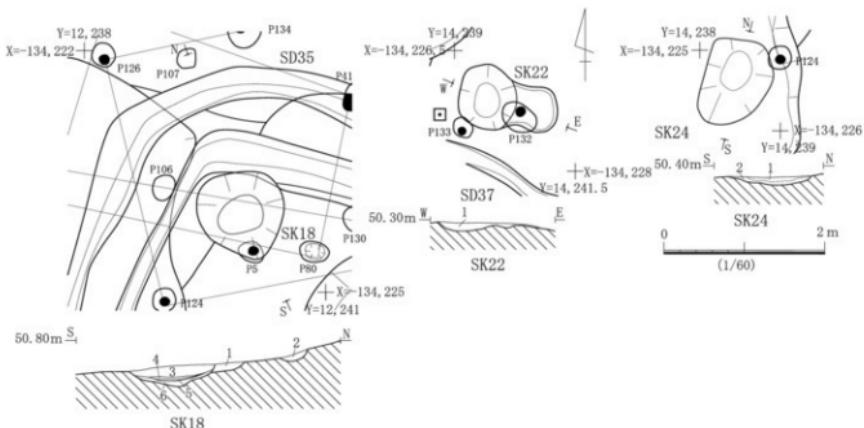
【SK31土坑】

曲輪1地山面で確認された。SK30、SB5、SB6、SK24、SK19、SK18、SD35、SD36より古い。平面形は東側と南側が新しい土坑により破壊されるため明確ではないが、隅丸方形と考えられる。規模は南北3.97m以上、東西3.13m以上、深さは北側の地山面より0.55mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は白色粘土、黄褐色砂ブロックを含むにぶい黄色砂である。

遺物は出土していない。



第14図 曲輪1土坑(2)



SK18

層	土 色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色10YR4/3	砂	にぶい黄褐色砂小ブロックを少量含む。	SD35
2	にぶい黄褐色10YR4/3	砂	にぶい黄褐色砂小ブロックを少量含む。	SD36
3	黒褐色 10YR2/2	シルト質砂	にぶい黄褐色砂ブロックを含む。自然。	SK18
4	にぶい黄褐色10YR5/4	砂	暗褐色シルト質砂ブロックを含む。自然。	
5	黒褐色 10YR2/2	シルト質砂	自然。	
6	にぶい黄褐色10YR5/4	砂	黒褐色シルト質砂ブロックを含む。自然。	

SK22

層	土 色	土性	含有物など	備考
1	黒色 7.5YR2/1	砂	炭片・炭化。黒褐色砂ブロックを多く含む。自然。	

SK24

層	土 色	土性	含有物など	備考
1	黄褐色 10YR5/6	砂	黒褐色砂ブロックを少量含む。自然。	
2	黒色 7.5YR2/1	砂	褐5~20mmの炭片。孫5mm前後の機土粒。黒褐色砂ブロックを多量に含む。自然。	

SK19・SK30・SK31

層	土 色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色10YR4/3	砂	にぶい黄褐色砂小ブロックを少量含む。	SD35
2	にぶい黄褐色10YR4/3	砂	にぶい黄褐色砂小ブロックを少量含む。	SD36
3	黄褐色 10YR5/6	砂	暗褐色砂ブロックを少含む。	P95 堆積
4	黄褐色 10YR5/6	砂	暗褐色砂ブロックを多く含む。	P95 堆積
5	黄褐色 10YR5/6	砂	暗褐色砂ブロックを少含む。	振り方
6	明黄褐色 10YR6/6	砂	にぶい黄褐色砂を斑状に含む。	
7	にぶい黄褐色10YR4/3	砂	にぶい黄褐色砂ブロックを少し含む。	SK19
8	明黄褐色 10YR6/6	砂	にぶい黄褐色砂を斑状に含む。	
9	にぶい黄褐色10YR4/3	砂	にぶい黄褐色砂ブロックを少し含む。	
10	にぶい黄褐色	砂		
11	にぶい黄褐色10YR5/3	砂	白色土小ブロック。小礫を多く含む。	
12	灰黄褐色 10YR4/2	砂	黄褐色砂小ブロックを若干含む。自然。	SK30
13	灰黄褐色 10YR6/2	砂	灰色砂をラミナ状に含む。自然。	
14	にぶい黄色 2.5Y6/3	砂	白色土粒。黄褐色砂小ブロックを多く含む。	SK31

第15図 曲輪1土坑(3)

【SK32土坑】

曲輪1地山面で確認された。重複する遺構はないが、SB1とは位置的に重複する。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸0.67m、短軸0.64m、深さは0.06mである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は褐色砂ブロックを多く含む黒褐色砂である。

遺物は出土していない。

【SK33鍛冶遺構】

曲輪1で確認された。SK30、SK20、SK21より新しい。また、SB8と位置が重複する。平面形は

梢円形である。規模は長軸1.16m、短軸0.97m、深さは0.07mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。底面中央付近は径0.34～0.40mの範囲で火を受けて極めて強く赤色硬化している。堆積土は黒褐色シルトである。堆積土の水洗作業を実施したが、鉄滓等は確認できなかった。

遺物は出土していない。

【SK34焼成遺構】

曲輪1地山面で確認された。重複関係はないがSB1とは位置が重複する。平面形は隅丸方形である。規模は長軸0.83m、短軸0.80m、深さ0.06mである。底面は平坦である。底面中央付近が0.40～0.48mの範囲で赤色硬化している。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色シルトであり、下部で炭化物片がやや多く確認されている。

遺物は出土していない。

④溝跡

【SD35溝跡】

曲輪1で確認された弧状にめぐる溝跡である。SK31、SK30、SK19、SB6より新しい。規模は長さ7.57m、幅0.34～0.57m、深さは0.14mである。底面は皿状で、壁は急に立ち上がる。堆積土はにぶい黄褐色砂であり、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SD36溝跡】

曲輪1で確認されたコの字状にめぐる溝跡である。SK31、SK30、SK24、SK19、SK20より新しく、SK18より古い。規模は長さ8.37m、幅0.20～0.48m、深さ0.15mである。底面は皿状で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土はにぶい黄褐色砂であり、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SD37溝跡】

曲輪1地山面で確認された東西方向の溝跡である。重複関係はない。規模は長さ2.0m、幅0.24m、深さは0.05mである。底面は皿状で、壁は急に立ち上がる。堆積土はにぶい黄褐色砂であり、自然堆積である。

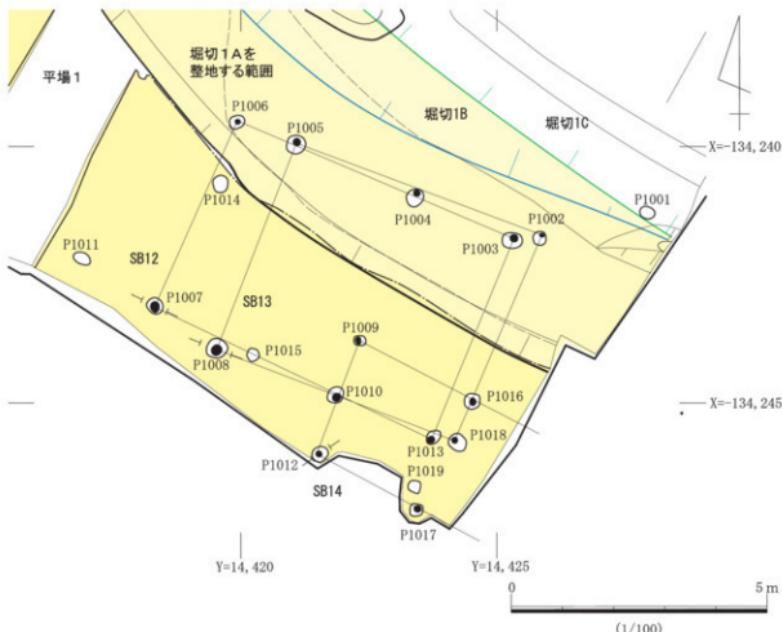
遺物は出土していない。

(3) 平場1の遺構

平場1で確認された城館期の遺構は建物跡3棟、組み合わないピット6基である。

①建物跡

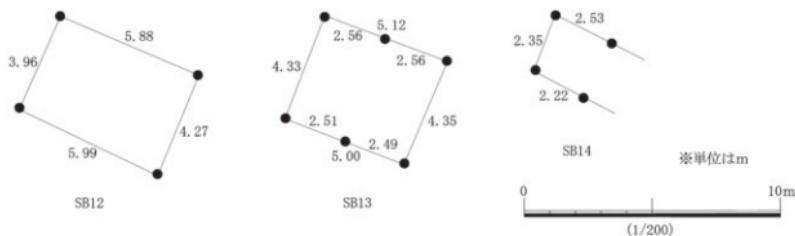
【SB12建物跡】



第16図 平場1建物跡



第17図 平場1検出建物跡柱穴断面



第18図 平場1検出建物跡模式図

平場 1 整地層、堀切 1 A 底面で確認された。検出された位置や堆積土の状況から本来堀切 1 A 整地層上面より掘り込まれたものと考えられる。桁行 1 間、梁行 1 間の東西棟である。SB13、SB14 とは位置が重複する。建物総長は桁行が北側柱列で 5.88m、東妻が 4.27m である。方向は西側柱列で計測すると N-24° -E である。柱穴は 4 ヶ所で確認された。平面形は隅丸長方形であり、長軸 0.25~0.39m、短軸 0.24~0.32m、深さは 0.27~0.36m である。埋土は黄褐色砂や褐色砂、炭化物を含むにぶい黄褐色砂質シルトである。柱痕跡は 4 ヶ所で確認され、径 0.10~0.21m である。堆積土は黄褐色砂や褐色砂、炭化物を含む褐色砂質シルトやにぶい黄褐色砂質シルトである。

遺物は出土していない。

【SB13建物跡】

平場 1 整地層、堀切 1 A 底面で確認された。検出された位置や堆積土の状況から本来堀切 1 A 整地層上面より掘り込まれたものと考えられる。桁行 2 間、梁行 1 間の東西棟である。SB12、SB14 とは位置が重複する。建物総長は桁行が北側柱列で 5.12m、柱間寸法は西より 2.56m、2.56m、西妻は 4.33m である。方向は西側柱列で計測すると N-21° -E である。柱穴は 6 ヶ所で確認された。平面形は隅丸方形や円形であり、長軸 0.27~0.42m、短軸 0.27~0.38m、深さは 0.28~0.41m である。埋土は黄褐色砂や褐色砂、炭化物を含むにぶい黄褐色砂質シルトである。柱痕跡は 6 ヶ所で確認され、径 0.13~0.21m である。堆積土は黄褐色砂や褐色砂、炭化物を含む褐色砂質シルト～にぶい黄褐色砂質シルトである。

遺物は出土していない。

No.	柱穴						備考	遺構	No.	柱穴						備考	遺構		
	平面形	長軸	短軸	深さ	埋土	平面形				平面形	長軸	短軸	深さ	埋土	平面形				
P1002	隅丸長方形	27.8	27.2	24	イ	楕円形	9.7	7.6	③	P1009	隅丸長方形	24.4	20.6	28	□ 2	楕円形	15.2	10.7	⑤
P1006	隅丸長方形	30.1	25.0	36	イ	楕円形	16.6	10.2	③	P1016	隅丸長方形	30.5	30.0	34	○ 3	楕円形	15.1	12.5	①
P1007	隅丸長方形	32.4	29.0	27	口 1	楕円形	21.8	17.4	④	P1017	隅丸長方形	25.1	24.4	32	○ 3	楕円形	14.1	12.8	⑤
P1018	隅丸長方形	36.8	30.4	32	口 4	楕円形	12.1	11.4	①	P1012	隅丸長方形	32.5	28.5	34	□ 1	円形	12.4	11.7	①
P1003	隅丸長方形	39.3	30.3	27	イ	楕円形	15.7	15.1	③	P1001	楕円形	30.4	23.3	23	—	—	—	—	複数
P1004	隅丸長方形	36.8	31.6	35	イ	楕円形	13.5	12.6	③	P1011	—	—	—	—	—	—	—	—	
P1005	隅丸長方形	36.8	32.5	30	イ	楕円形	15.1	14.3	③	P1014	隅丸長方形	33.4	28.4	24	—	—	—	—	—
P1008	隅丸長方形	42.6	38.7	28	口 1	楕円形	21.7	20.4	④	P1015	楕円形	26.0	24.0	18	—	—	—	—	—
P1010	隅丸長方形	35.4	30.5	43	口 1	楕円形	17.4	15.8	②	P1019	隅丸長方形	24.4	22.9	30	□ 3	—	—	—	—
P1013	隅丸長方形	32.4	23.8	36	口 1	楕円形	14.5	13.5	⑩	P1020	隅丸長方形	27.8	34.4	33	△ 1	—	—	—	—
										P1021	方型	17.6	15.9	17	—	—	—	—	—

単位(cm)

柱穴	にぶい黄褐色 10YR5/4 級質シルト	黄褐色砂、炭化物を含む
口 1	にぶい黄褐色 10YR5/4 級質シルト	褐色シルト、にぶい黄褐色砂、炭化物を含む。
口 2	黄褐色 10YR5/6 級質シルト	褐色シルト、明黄褐色、にぶい黄褐色砂、炭化物を含む。
口 3	にぶい黄褐色 10YR5/4 級質シルト	明黄褐色土を多く、褐色シルト、にぶい黄褐色砂、炭化物を含む。
口 4	にぶい黄褐色 10YR5/3 級質シルト	明黄褐色土ブロックを多く含む。
ハ	にぶい黄褐色 10YR6/4 級シルト	浅黄褐色シルトブロック、にぶい黄褐色シルト、炭化物を含む。
ニ	灰褐色 10YR4/2 シルト	黄褐色粘土ブロックを含む。

柱痕跡

- ① にぶい黄褐色 10YR5/4 級質シルト にぶい黄褐色 10YR6/4 シルトを含む
- ① にぶい黄褐色 10YR5/4 級質シルト
- ② にぶい黄褐色 10YR4/3 級質シルト
- ③ 黄褐色 10YR4/4 級質シルト
- ④ にぶい黄褐色 10YR5/4 級質シルト 褐色シルト、にぶい黄褐色砂、炭化物を含む。
- ⑤ 黄褐色 10YR4/4 級質シルト 黄褐色ブロックを含む
- ⑥ 暗褐色 10YR3/3 級質シルト 黄褐色土を含む

第 5 表 平場 1 ピット属性表

【SB14建物跡】

平場 1 整地層で確認された。桁行 1 間以上、梁行 1 間以上の建物である。平場 1 南縁で検出されていることから、調査区の南側にはのびず、桁行1間の建物となり、東側につづく可能性が考えられる。SB12、SB13とは位置が重複する。建物総長は桁行が北側柱列で 2.53m、西妻で 2.35m である。方向は西側柱列で計測すると N-20° -E である。柱穴は 4 ヶ所で確認された。掘り方の平面形は隅丸方形や楕円形で長軸 0.21～0.30m、短軸 0.24～0.32m、深さは 0.28～0.34m である。埋土は黄褐色砂や褐色砂、炭化物を含むにぶい黄褐色砂質シルトである。柱痕跡は 4 ヶ所で確認された。径 0.12～0.15m である。堆積土は黄褐色砂を含む褐色砂質シルト～にぶい黄褐色砂質シルトである。

遺物は出土していない。

(4) その他の遺構

時期不明の土坑 1 基が調査区北西隅付近で確認されている。

【SK29土坑】

調査区北西隅の地山面で確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸 0.83m、短軸 0.58m、深さは 0.24m である。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は灰黄色砂、暗灰黄色粘土質シルト、褐灰色シルト、灰色粘土で、自然堆積である。

遺物は出土していない。

B. 城館期以前の遺構

(1) 整地層下・土壠積土下で検出した遺構

土壠 2、3 積土下の地山面において土坑 4 基を確認した。楕円形のもの (1～1.5m) と円形 (2.5m) のものがある。土壠 3 下で確認された前者の 2 基には上層に灰白色火山灰が確認できることから、古代のものである。

【SK25土坑】

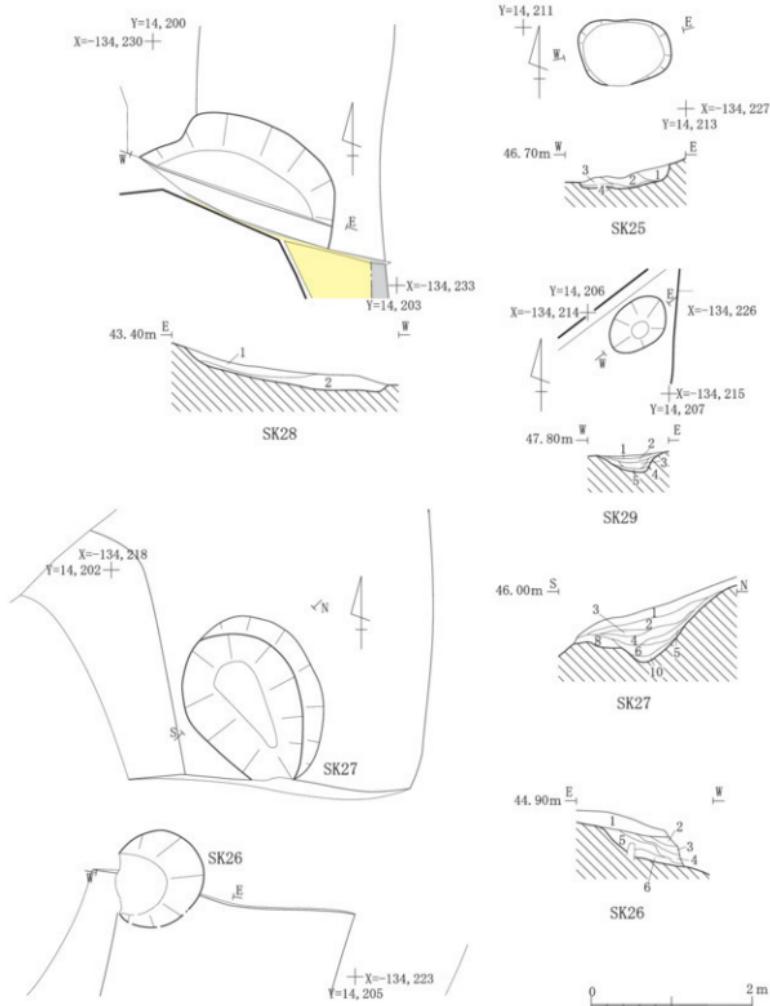
土壠 2 整地層下の地山面で確認された。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸 1.10m、短軸 0.83m、深さは 0.30m である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は灰黄褐色シルトであり、自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SK26土坑】

土壠 3 整地層下の地山面で確認された。平面形は隅丸方形である。規模は長軸 1.16m 以上、短軸 1.10m、深さは 0.47m である。底面は皿状で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は灰黄褐色砂であり、堆積土の上部には灰白色火山灰粒が含まれる。自然堆積である。

遺物は土師器小破片が出土している。



第19図 土壘2・3 整地層下検出土坑

VI. 検出された遺構と遺物

SK25

層	土色	土性	含有物など	備考
1	灰黄色 2.5Y6/2	シルト	黒褐色粒、炭化物粒を若干含む。	
2	黄灰色 2.5Y4/1	シルト	黒褐色粒、炭化物粒、灰黄色シルト粒を若干含む。	
3	黄灰色 2.5Y5/1	シルト		
4	灰黄色 2.5Y6/2	シルト	黄褐色砂質シルトブロックを多く含む。	

SK26

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト		旧表土
2	黒色 10YR1.7/1	粘土質シルト		
3	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	灰白色火山灰ブロックを含む。	
4	灰黄褐色 10YR4/2	砂	黄褐色粘土質シルト小ブロック、灰白色砂小ブロックを斑状に含む。	
5	灰黄褐色 10YR5/2	砂	黄褐色粘土質シルト小ブロック、灰白色砂小ブロックを斑状に含む。	
6	灰黄褐色 10YR4/2	砂	黄褐色粘土質シルト小ブロック、灰白色砂小ブロックを斑状に含む。	

SK27

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト		旧表土
2	黒色 10YR2/1	粘土質シルト	黄褐色粘土小ブロック、黒褐色粘土質シルト小ブロックをまばらに含む。	
3	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	灰白色火山灰ブロックを含む。	
4	暗褐色 10YR3/3	シルト質粘土	黄褐色粘土質シルト小ブロック、にぶい黄砂小ブロック、炭化物粒をまばらに含む。	
5	灰黄褐色 10YR5/2	砂	炭化物粒を微量含む。	
6	にぶい黄色 2.5Y6/3	粘土		
7	黄褐色 2.5YR5/3	シルト		
8	暗灰黄色 2.5Y5/2	砂	炭化物粒を含む。	

SK28

層	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂	炭化物を若干含む	
2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂		

SK29

層	土色	土性	含有物など	備考
1	灰黄色 2.5Y6/2	砂	橙色粘土粒、小ブロック、黒色土粒をまばらに含む。	
2	暗灰黄色 2.5Y5/2	粘土質シルト	炭化物粒を若干含む。	
3	暗黄色 2.5Y5/2	粘土質シルト		
4	褐色 10YR4/1	シルト		
5	灰色 7.5YR4/1	粘土	黄褐色粘土小ブロックを多く含む。	

第6表 土壌2・3整地層下検出土坑断面

【SK27土坑】

土壌3整地層下の地山面で確認された。平面形は梢円形である。規模は長軸1.89m、短軸1.39m、深さは0.52mである。底面は皿状で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は10層に細分され、いずれも自然堆積である。堆積土中に焼土粒や炭化物粒がまばらに含まれる。上部は灰白色火山灰により覆われる。

遺物は土師器甕口縁部破片が1点出土している。

【SK28土坑】

調査区南西隅付近、土壌3整地層下の地山面で確認された。平面形は円形とみられる。規模は南北1.23m以上、東西2.52m、深さは0.10mである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土はにぶい黄褐色砂で、自然堆積である。

遺物は刷片が1点出土している。

C. 出土遺物

表土や遺構堆積土から縄文土器、石器、須恵器、土師器、土師質土器、鉄製品、石製品が少量出土している（写真図版8、第7表）。数量が少数であることから、概要についてまとめて記述する。

(1) 縄文時代

【縄文土器】

曲輪1旧表土より2点出土した。鉢口縁部破片の外面はLR縄文で、口縁部は凹凸があると考えられる。体部破片は外面に縄文が確認できるが、小片で摩滅しており、特徴を把握できない。いずれも時期は不明である。

【石器】

剥片が3点、叩き石が1点出土した。剥片1点がSK28堆積土より出土したほかはいずれも表土からの出土である。剥片は打点が確認できるものがある。頁岩、鉄石英、瑪瑙が用いられている。叩き石は1点ある。内外面ともに使用痕跡が確認できる。

(2) 古代

【土師器】

SK26、SK27付近を掘り下げた際の廃土より確認された壺と甕の破片2点である。本来、SK26あるいはSK27に伴うものと考えられる。いずれも製作にロクロを用いないものである。壺は底部破片であり、丸底のものと考えられる。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が行われている。甕は外面が横ナデ、内面が横ナデとハケメ調整が行われる。SK27堆積土より出土した甕口縁部破片はマツツが著しく、特徴を把握できない。

【須恵器】

高台付壺、壺の破片がある。土星2整地層、堀切2から出土した高台付壺の底部は再調整のちナデが行われており、切り離し技法は不明である。SK19堆積土より出土した甕は頸部破片であり、内外面ともにロクロナデが行われる。

(3) 中世

【土師質土器】

皿とみられる破片が2点出土した。堀切1C堆積土から出土した皿破片はロクロナデ調整のもので、底部切り離しは回転糸切りの後ナデ調整が行われたものとみられる。P109埋土から出土した皿はマツツが著しく、器面も剥離していることから特徴は把握できない。

【鉄製品】

4点出土した。

堀切1A整地層より不明銅製品が1点出土した。薄い板状で縁をもつものである。

廃土より鍋の破片とみられる口縁部破片が1点出土している。

平場1表土より古銭1点出土した。銭種は洪武通宝（明銭、1408年初鋤）である。

VI. 検出された遺構と遺物

土塁 2 積土より碗型溝が1点出土している。

【石製品】

SK20堆積土より砥石が1点出土した。中ほどより欠損している。4面を使用しており、細かい擦痕が観察できる。凝灰岩を用いる。

遺物 地区・遺構	石 器		土 器				磁器	焼けた 粘土	砥石	古錢	鉄製品	鐵滓
	剥片	タタキ 石	不明	織文 土器	土師器	須恵器						
曲輪1 表土	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
曲輪1 旧表土	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
切岸 表土	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平場1 表土	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	1	0
堀切1 A 整地	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
堀切1C 堆積土	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
堀切2 不明	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
土塁2 整地	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
SK19 堆積土	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
SK20 堆積土	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
SK26 堆積土	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
SK27 堆積土	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
SK28 堆積土	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
P109 埋土	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
土塁3付近 廃土	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
不明 廃土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
小計	4	1	1	2	4	3	2	3	1	2	1	3

第7表 出土遺物集計表

遺構名	規 模	地盤層・堆積土の特徴	特 記 事 項
曲輪1	南北16.6m以上、東西17.5m以上。整地層の長さ17m、最大幅4.3m、厚さ0.8m。	にない黄褐色砂、浅黄色砂、明黃褐色砂質シルト	地山を削り出し、南側から西側縁辺を整地し、平坦面を造成する。平坦面は幅2m程である。土壌1の方向から整地が行われており、土壌1と同時に埋蔵されている。
平場1	南北8.3m、東西22m以上。整地層は長さ22m以上、幅5~8mで、堀切1C側面では10m、底土の厚さ最大1.4m。	明黃褐色粘土質シルト、暗褐色シルト、にない黄褐色砂など 堀切1 A: にない黄褐色砂による削剝 堀切1 B: にない黄褐色シルト質粘土、にない黄色シルトによる整地	地山を削り出し、南側から西側を整地して平坦面を造成する。整地は標高の高い東側と北西側から標高の低い南西側方向に行われる。南側に位置する平場との比高差は約2.8m。
土壌1	長さ7.3m、幅2.9m、堀切1 底面から高さ0~7.5m。	にない黄褐色砂、浅黄色砂、灰黃褐色シルト	土壌1の東側は地山削り出しを行い、西側は盛土（厚さ0.6m）が行われる。
土壌2	長さ20m以上、幅5 m、堀切2 底面から高さ2.5~3.7m。	灰黃褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルト	北側は地山削り出し、頂上部から西側に盛土（厚さ0.6~1m）が行われる。
土壌3	長さ31m以上、幅2.9m、西側の地山削りから高さ1.7m。	灰黃褐色砂、にない黄褐色シルト	旧表土上に盛土（厚さ1m）が行われる。
西側の整地層	長さ17mほど、幅2m以上、厚さ0.8m。	地山ブロックを含むにない黄褐色シルト、明黃褐色砂質シルトや地山ブロックを含む灰黃褐色シルトと黒褐色粘土。	堀切2 西側に位置する。傾斜部分に東西17mにわたり整地が行われる。
堀切1	長さ南北26m以上、東西13.4m以上、幅C側: 9m (A側: 2.8m以上、B側: 2.2m以上)、深さ1.9~3.8m (切岸1 C側削剥斜面あり)。	A期: にない黄褐色砂 B期: 浅黄色砂、暗灰黃褐色砂、灰黃褐色粘土 C期: にない黄褐色砂、灰黃褐色砂、黑褐色粘土	3時間、最も古いA期溝の心材の位置を2.5m、B期に押し、B-C期が削剥される。この際、A、B期部分は整地される。跡は南北方向でU字形、東西方向でA期が箱状、C期でU字形。
堀切2	長さ18m以上、幅5 m、深さ2~3.8m。	黒褐色	断面はU字形。

土木工事にかかる遺構属性表

遺構名	位置	構造・特徴	規模(長さ)	柱間	方向	重複
SB1	曲輪1	桁行2間、梁行1間 南北棟	桁行3.77m (東側) 梁行3.13m (北側)	北より1.88m、1.89m	N2° E (西側)	
SB2	曲輪1	桁行2間、梁行1間 南北棟	桁行3.88m (西側) 梁行3.27m (北側)		N39° W (西側)	
SB3	曲輪1	桁行2間、梁行1間 南北棟	桁行3.16m (西側) 梁行2.04m (南側)		N22° E (西側)	
SB4	曲輪1	桁行2間、梁行2間 東西棟	桁行5.49m (北側) 梁行4.34m (南側)	西より3.05m、2.44m 北より2.18m、2.16m	N12° E (西側)	SK31、SK30、SK19→SB4→SB36
SB5	曲輪1	桁行1間、梁行1間 東西棟	桁行4.39m (北側) 梁行3.14m (南側)		N14° W (西側)	SK31→SB5→SK24、SK19 SK30との新旧不明
SB6	曲輪1	桁行1間、梁行1間 東西棟	桁行3.43m (南側) 梁行2.55m (西側)		N17° E (西側)	SK31、SK30、SK19→SB6→SK35
SB7	曲輪1	桁行1間、梁行1間 東西棟	桁行1.93m (南側) 梁行1.64m (西側)		N26° W (西側)	SK20、SK21→SB8
SB8	曲輪1	桁行1間、梁行1間 東西棟	桁行2.70m (西側) 梁行2.47m (北側)		N24° W (西側)	SK30、SK20→SB9→SK21 SK33と位置が重複
SB9	曲輪1	桁行1間、梁行1間 南北棟	桁行2.58m (西側) 梁行2.58m (北側)		N11° W (西側)	
SB10	曲輪1	2間以上	總長2.59m	北より1.32m、1.27m	N22° W	
SB11	曲輪1	1間以上	總長2.72m		N20° W	
SB12	平場1	桁行1間、梁行1間 東西棟	桁行5.88m (北側) 梁行4.27m (東側)		N24° E (西側)	
SB13	平場1	桁行2間、梁行1間 東西棟	桁行5.12m (北側) 梁行4.33m (西側)	西より2.56m、2.56m	N21° E (西側)	堀切1A→SB13
SB14	平場1	北側柱列1間以上、 西側柱列1間以上、 2.35m (西側)	2.53m (北側) 2.35m (西側)		N20° E (西側)	堀切1A→SB14
SB38	曲輪1	桁行1間、梁行1間 南北棟	桁行3.19m (西側) 梁行1.99m (南側)		N19° E (西側)	SK30、SK20→SB38→SK18 周囲をSD36、SD38に囲まれる
SA15	曲輪1	2間 東西方向	總長4.46m	西より2.29m、2.17m	E3° N	
SA16	曲輪1	3間 南北方向	總長8.82m	西より2.56m、3.54m、2.33m	N31° W	
SA17	曲輪1	2間 東西方向	總長4.37m	西より2.20m、2.17m	E17° S	

建物跡・柱列跡属性表

第8表 遺構属性表 (1)

VI. 検出された遺構と遺物

No.	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	堆積土	重複関係	備考	時期
SK18	楕円形	1.11	1.07	0.25	黒褐色シルト質砂、にぶい 黄褐色砂。自然。	SK31、SK30、SD36、SB38→SK18		城館期かそれ以降
SK19	不正形	6.03	2.96	0.43	明黄褐色砂。にぶい黄褐色砂。	SK31、SB5、SK24→SK19→S B35、SB6		城館期
SK20	楕円形	3.01	2.58	0.33	にぶい黄褐色砂。黒色砂。人為	SK30→SK20→SK33、SB8、S B9、SD36、SB38		城館期
SK21	楕円形	2.62	1.85	0.29	灰白色粘土、黒褐色砂。人為	SK30、SB9→SK21→SK33、S B8		城館期
SK22	楕円形	1.24	0.79	0.12	黑色砂。自然。	SK30→SK22		城館期
SK23	不正形で楕円形に近い	2.04	1.88	0.42	褐色砂。自然。	SK30→SK23→SD36		城館期
SK24	橢丸長方形	1.08	0.83	0.12	黑色砂、黄褐色砂。	SK31、SB5→SK24→SK19		城館期
SK25	橢丸長方形	1.10	0.83	0.30	灰黄色シルト、黄灰色シルトで炭化物や、燃土粒を含む。自然。	SK25→土壌2		古代か
SK26	楕円形	1.10	1.16	0.47	暗褐色シルト、黄褐色シルト。上部に灰白粘合部。	SK26→土壌3		古代
SK27	楕円形	1.89	1.39	0.52	黒褐色シルト質粘土、黄褐色シルト、燃土、炭化物を含む。上部に灰白含む。自然。	SK27→土壌3		古代
SK28	楕円形か	2.52	1.23	0.10	にぶい黄褐色砂で上層に炭化物を含む。自然。	SK28→土壌3		古代か
SK29	楕円形	0.83	0.58	0.24	灰黄色砂、明灰黄色粘土質シルト、褐褐色シルト、灰褐色粘土で炭化物粒、地山粒を含む。自然。			時期不明
SK30	橢丸長方形	7.30	5.18	0.52	にぶい黄褐色砂、灰黄褐色砂。自然。	SK31→SK30→SK18、SK19、 SK20、SK21、SK22、SK23、 SB6、SB5、SB9、SB3、SB35、 SB5との新旧不明	縦断面に幅0.20m、深さ0.10 mの溝あり	城館期
SK31	橢丸方形か	3.97	3.13	0.55	白色土粒、黄褐色砂ブロックを含むにぶい黄色砂。	SK31→SK30、SB5、SB6、SK 24、SK19、SK18、SB35、SD 36		城館期
SK32	橢丸方形	0.67	0.64	0.06	褐色砂ブロックを多く含む 黑褐色。			城館期か
SK33	楕円形	1.16	0.97	0.07	黒褐色シルト、褐色砂ブロックを少し含む。	SK30、SK20、SK21→SK33	底面中央付近が約0.40m × 34mの範囲で極めて狭けている。SB8と位置が重複	城館期
SK34	橢丸方形	0.83	0.80	0.06	黒褐色シルト、炭片を含む。		底面が約0.48m × 0.40mの範囲で狭けている。	城館期

土坑属性表

No.	平面形 ・方向	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	断面形	堆積土	重複関係	備考
SD35	弧状	7.57	0.34~0.57	0.14	断面弧状、壁は急に立ち上がる。	にぶい黄褐色砂。自然。	SK31、SK30、SK19、SB6→SD35	
SD36	コの字状	8.37	0.20~0.48	0.15	断面弧状、壁は急に立ち上がる。	にぶい黄褐色砂。自然。	SK31、SK30、SK24、SK19、 SB38の周囲を囲む	
SD37	東西方向	2.00	0.24	0.05	断面弧状、壁は急に立ち上がる。	にぶい黄褐色砂。自然。		SB38の周囲を囲む

溝跡属性表

第9表 遺構属性表（2）

V. 考察

検出された遺構は城館期に伴う遺構と城館期以前の遺構である。以下、各期の遺構の特徴についてまとめ、検討を行う。

1. 城館期

(1) 城館の立地と土木工事

確認できた旧地形（旧表土）や仮設道部分の確認調査の結果からこの地点は南側から入る支谷（土塁3、堀切2付近）を利用して、盛土と切土による大規模な土木工事を行うことで城跡の西端としていることが判明した。さらに北東から南西に傾斜する丘陵の旧表土以下を大きく掘削して堀切、切岸を造り、旧表土上に盛土して土塁や平坦面を構築している。これらの土木工事はきわめて大規模なものであり、堀切、切岸の掘削は2~7mにも及ぶとともに旧表土上に0.6~1m盛土を行い、土塁を構築している。また、曲輪1や平場1では断面三角形状の盛土を0.8~1.5m行うことで平坦面を造成している。

さらに明確に城館跡の西端と考えられる外側（西側）においても整地層が確認された。城館の造成に伴う土木工事が城域の外側まで及んでいることが判明したことが特筆できる。

(2) 各遺構の特徴

①重複関係

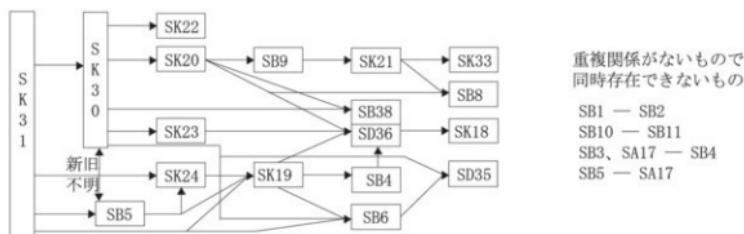
確認された遺構の重複関係は第20図のとおりである。

②建物跡

曲輪1で検出された建物跡は12棟である。規模がわかるものでは桁行1間、梁行1間のものが8棟、桁行2間、梁行1間のものが1棟、桁行2間、梁行2間のものが1棟である。面積をみると3~7m²のものが6棟であり、いずれも桁行1間、梁行1間のものである。10~13m²のものが3棟でこのうち桁行1間、梁行1間のものが2棟である。桁行2間、梁行2間のものは22m²であり、桁行1間、梁行1間で面積3~7m²のものが半数を占めている。桁行や梁行の柱間寸法は1.64mから5.50mでまちまちであるが、2~3mにまとまる傾向がある。

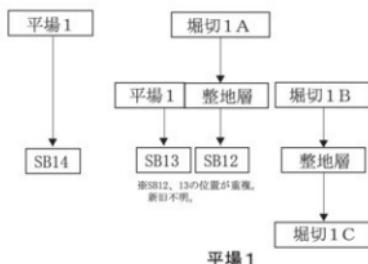
検出された建物跡の方向を見ると北で東に傾くものと北で西に傾くものがある。しかし、建物跡には重複関係が認められない。

平場1では3棟検出された。いずれもほぼ同位置で建て替えられており、方向は類似している。検出された位置関係からSB14は堀切1A機能段階のもの、SB12、13は堀切1Aが整地された後のもので、堀切1B、C段階に伴うものと考えられる。全体の規模がわかるものは2棟である。桁行1間、梁行1間あるいは桁行2間、梁行1間のものである。SB12がSB13よりも桁行がやや大きいが、面積は22.1~24.5m²でありほぼ同規模である。柱間寸法はまちまちであるが、桁行では2.5~2.8m、梁行は4.3mにまとまる。建物跡の性格については明確ではないが、平場1で確認された遺構が建物跡のみ



※重複関係のない遺構…SB1、SB2、SB3、SB7
SB10、SB11、SA15、SA16、SA17、SK32、SD37

曲輪1



第20図 遺構の重複関係

であり、堀切1の掘りなおしに伴いほぼ同位置で建て替えられることから、同じ性格をもつ建物跡であるとみられる。

③柱列跡

柱列跡は曲輪1で3列検出された。SA15は曲輪1整地層及び旧表土上、SA16は地表面で確認された。柱列跡の西側では土壘1のみが分布し、地形にあわせて造営されていることから、曲輪1で確認された建物跡や土坑を遮蔽する施設であると考えられる。SA17はSB3の東側に位置するもので、SB3南側柱列と柱筋がほぼ一致することから、同時に存在していたと考えられる。

④土坑

曲輪1で検出された土坑は次のように分類することができる。

A 1 類 平面形が円形から梢円形で規模が1m前後のもの。堆積土に炭化物、焼土を含むものもある。SK18、SK22、SK24、SK32が該当する。

A 2 類 平面形が円形から梢円形で規模が1m前後のもの。堆積土に炭化物、焼土を含み、底面が焼ける。SK33、SK34が該当する。

B 1 類 平面形が円形から梢円形で規模が2～3mのもの。底面は平坦である。SK20、SK21が該当する。

B 2 類 平面形が不正形で底面が平坦なもの。SK19が該当する。

B 3 類 平面形が円形から梢円形で規模が2～3mのもの。底面は皿状のものである。SK23。

C類 平面形が隅丸方形あるいは隅丸長方形で底面が平坦なもの。SK30、SK31が該当する。

A2類は底面に焼け面があり、極めてよく赤色硬化していることから、鍛冶などの火を用いた作業が行われていることがわかる。また、A1類のうち、SK22、SK24でも焼け面は確認されないが、堆積土中に焼土や炭化物が含まれることから、火を用いた作業とかかわるものと考えられる。

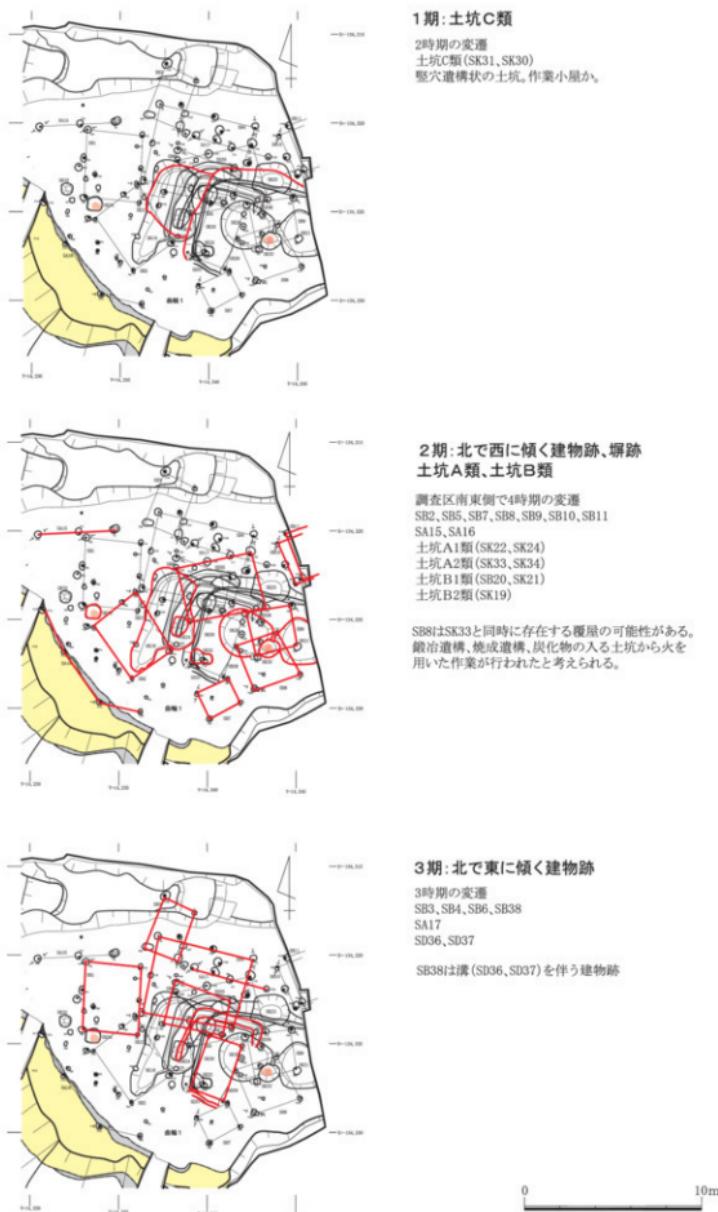
B1類では2～3m、B2類では長軸6m、短軸2mの規模をもち、底面はほぼ平坦である。人為的に埋め戻されているものもある。十分な平坦面が造成されているという特徴を持つ。また、C類については平面形が隅丸方形あるいは隅丸長方形と考えられ、4～7mの規模を持つ。底面は平坦で、SK30では壁際に溝を持っている。遺構に伴う柱穴は確認されないが、遺構の性格は土坑とするよりも竪穴遺構と考えができるものかもしれない。

これらの重複関係をみるとC類→B類→A類と重複するが、各類で重複しないものは同時に存在していた可能性もある。これらはほぼ同位置に構築されており、B 1、 2類、 C類は平面形や規模に違いはあるが、底面が平坦であることから同様の性格を持つものと想定され、何らかの作業を行う空間あるいは作業に伴う施設と考えられる。A 1類のうちのいくつかは火を用いた作業に伴う施設という性格が想定される。

(3) 遺構の変遷

曲輪1南側の切岸裾部と連続する堀切1では3時期（A期→C期）の変遷があり、最も古いA期の位置を北側に移しB・C期の堀切を設けていることが確認された。また、曲輪1南側の切岸では中程で傾斜が変わり、変曲点上方の傾斜の緩い部分が堀切1 A期、下方の傾斜の急な部分が堀切1 B・C期に対応すると考えられる。調査地点は火砕流再堆積層であり、遺構が確認された面はこれらが風化したため砂質となっている。調査期間中幾度かの降雨により、堀切1が水没することがあった。そのつど、堀切1は5cmほどの砂が堆積する状況であり、一度の降雨で堆積が進む状況を経験した。堀切1で確認された自然堆積による砂層の堆積は約40cmであり、堀切1が2回掘りなおされたことは降雨による土砂運搬作用による埋没が頻繁におこったためであり、堀切1の埋没は短期間であったことも想定される。このことは城館が機能した期間もさほど長期間でなかった可能性もある。

曲輪1で確認された建物跡の変遷の詳細については明確には把握できなかった。ところで、調査区南東側では跡建物と土坑が同位置で6時期の重複が確認されている。土坑C類は曲輪1で検出された遺構の中では最も古いものであり、建物跡と土坑A、B類との関係は土坑より新しい建物跡と古い建物跡がある。重複関係をまとめると土坑C類→北で西に傾くSB5→SK24（土坑A 1類）→SK19（土坑B 2類）→北で東に傾くSB4であり、土坑との重複関係より建物跡は北で西に傾く建物跡→北で東に傾く建物跡という変遷が想定できる。このことから曲輪1では1期：土坑C類→2期：北で西に傾



第21図 曲輪1検出遺構変遷図

く建物跡と土坑→3期：北で東に傾く建物跡という3時期の変遷があるものと考えられ、2期と3期では建物跡や土坑の位置が重複し、同時に存在できないものがあることから3～4小間に細分される可能性を考えられる（第21図）。

平場1で確認された建物跡は3棟であり、平場1で1棟、堀切1Aを埋める整地層から掘りこまれたと考えられる2棟が確認され、堀切1Bと1Bを埋める整地層上、C堆積土では確認されなかった。このことから、堀切1の掘りなおしに伴い、建物跡も建て直されたことが想定される。

曲輪1での遺構変遷は明確に把握できなかったが、建物跡と土坑の重複関係から3時期の変遷が想定され、建物跡の建て替えが頻繁に行われていたことが考えられる。また、堀切1の2回の掘りなおし、平場1で確認された建物跡が同位置で建て替えられることはそれぞれ関連するものと考えられ、この地点では大別3時期の遺構の変遷があると想定される。堀切1の掘りなおしと平場1の拡張がみられるが、調査区内における城館の構造は当初より変化はなかったものと考えられる。

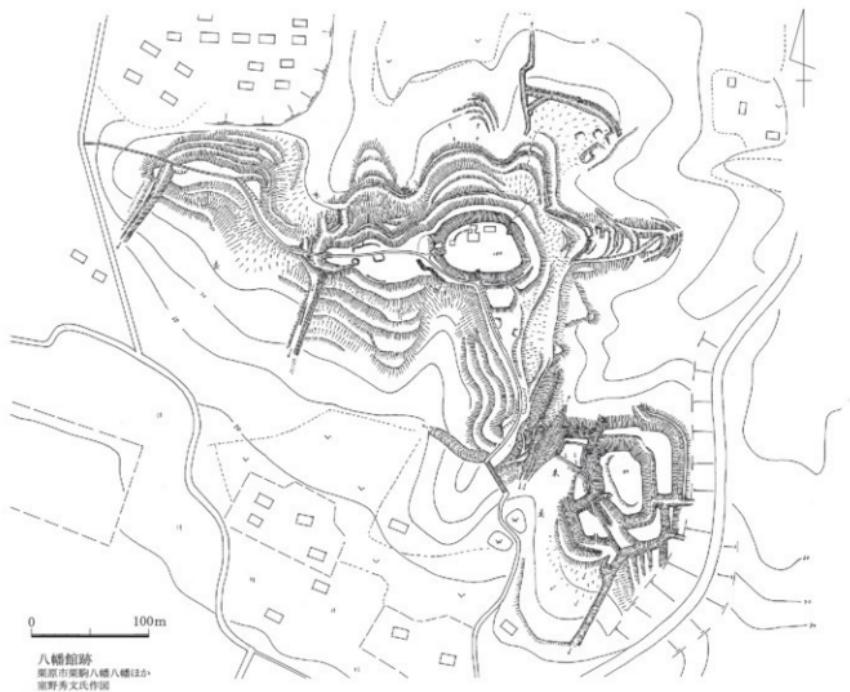
（4）城館跡の機能年代と調査区の性格について

城館期に伴う出土遺物が少ないとから、機能年代を詳細に検討することは難しい。平場1表土から出土した永楽通宝は1408年に鋳造されたもので、中世後期以降、日本に流通するものである。表土出土のため、城館に伴うものかは不明ではあるが、城跡が機能した時期を考える上では参考となる。

次に遺構の形態から年代について検討する。栗原市内において中世城館について面的な調査を実施した例は少ない。また、現況の遺構分布から構造を検討している例も多くない。丘陵を分断する堀切や土塁のあり方は周辺では類似する城館が確認されている。これまで地表顕在遺構で確認している例としては八幡館跡（第22図）、森館跡（第23図）、長網沢館跡、田高野館跡（栗駒地区）などがあり、丘陵を分断する大規模な堀切、曲輪裾部をまわる横堀が現状でも確認されている。しかし、これらの城館跡は発掘調査が実施されておらず、詳細な年代の検討はできていない。発掘調査が実施された岩手県奥州市白鳥館遺跡（前沢町教育委員会2005、奥州市世界遺産登録推進室2006、2007）や大和町八谷館跡（宮城県教育委員会1980e）で大規模な造成と曲輪を遮断する堀切、曲輪裾部をまわる堀跡など類似する構造が確認されている。白鳥館遺跡は出土遺物から15世紀前後する時期、八谷館跡は14世紀から16世紀中ごろの時期に城館として機能していることが判明している。地域が異なることから単純に比較はできないが、構造は類似するとみられる。これらのことから三玉城跡は戦国期ころに機能したと考えられる。

ところで、今回の調査では約1,200m²の調査を行い、建物跡や土坑などの遺構を確認することができたが、城館に伴うと考えられる遺物は10点にも満たないものであった。検出された遺構のうち、曲輪1では鍛冶遺構や焼成遺構があること、確認された建物跡が桁行1間、梁行1間ないし桁行2間、梁行1間の小型のものが多いという特徴があり、頻繁に建て替えが行われていた。曲輪1西端部は日常的になんらかの作業が行われた場であったと考えられる。また、平場1で確認された建物跡は堀切1の改修に伴い、ほぼ同位置で建て替えが行われており、同じ性格を持つ建物であったと考えられる。

今回の調査地点は城域の西端にあたり、検出された遺構と遺物から、敵からの攻撃を防ぐための防御施設であり、曲輪1は日常的に生活を行った場所ではなく、作業場であったと考えられる。



第22図 八幡館跡縄張図



第23図 森館跡略測図

2. 城館期以前

城館期の整地層下で確認された遺構は、土壙2、3下で確認された土坑4基がある。10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰が遺構の上部で確認されたSK26、SK27は古代のものと考えられ、灰白色火山灰が降下した10世紀前葉（西暦907～934年、宮城県多賀城跡調査研究所1998）には埋没しており、これ以前に機能していたものと考えられる。また、SK27には焼土、炭化物が含まれている。

SK26、SK27周辺からは製作にロクロを使用しない有段丸底とみられる土師器壺や頸部に段を持つ壺の破片、火を受けてマツツが著しい土師器壺口縁部破片が出土している。また、土壙2積土最下層からは須恵器高台付壺や碗型滓が出土している。碗型滓は出土層位から、古代のものが土壙積土内に混入したと捉えられる。碗型滓が出土していること、SK27では焼土や炭化物が確認されていることから、土壙2や土壙3がある西側に傾斜する斜面では火を用いた作業が行われた場所と推定される。遺物は破片のため詳細な年代は検討できないが、8世紀代から9世紀前半頃のものと考えられ、遺構が機能していた時期はおよそこの年代である可能性が考えられる。

SK25、SK28は年代を特定できる遺物が出土していないが、遺構の重複関係から中世以前ものである。

このほか、縄文土器や石器が少量出土しているが、小破片のため、詳細は検討できない。

VI. まとめ

1. 三玉城跡は二迫川右岸の丘陵上に位置する。堀切で分断された3つの曲輪が東西に連なる連郭式の中世城館跡である。
2. 調査地点は城跡の西端部付近にあたり、調査以前から曲輪と平場、土壙、切岸、堀切を明瞭に確認することができた。発掘調査の結果、これらの特徴や大規模な土木工事のあり方がさらに明確になり、敵から攻められないようにしている様子が判明した。
3. 曲輪1で検出された遺構には掘立柱建物跡12棟、柱列跡3条、土坑12基、溝跡3条、ピットがあり、建物跡や土坑の重複が著しいもので大別3時期の変遷があることが判明した。確認された建物跡は桁行1間、梁行1間で小型のものが多く、また、鍛冶遺構や壁際に溝を持つ土坑などが確認されていることから作業が行われた空間であると考えられる。
4. 平場1では掘立柱建物跡3棟が確認された。堀切1の掘り直しに伴い同位置で建て替えが行われている。
5. 曲輪1、平場1、堀切1、切岸での遺構の配置状況から大別3時期の変遷があると考えられる。
6. 三玉城跡は戦国期に機能していたと想定される。
7. 古代には灰白色火山灰が降下する以前の火を用いて作業が行われていた可能性が考えられる土坑が確認された。

参考引用文献

- 一迫町教育委員会2005a『いちはさまの歴史遺産』
- 一迫町教育委員会2005b『一迫町の文化財一覧』
- 奥州市世界遺産登録推進室2006『国史跡白鳥館遺跡発掘調査報告書—第4次調査—』
- 奥州市世界遺産登録推進室2007『国史跡白鳥館遺跡発掘調査報告書—第5次調査—』
- 葛西氏研究会編集者1992『奥州栗原郡金成邑熊野三所社縁起記』『葛西氏研究』第9号
- 金成町教育委員会1985「地方開拓の脊 中世の城館」金成町の文化財その8
- 金成町教育委員会1986「中世の供養碑 板碑」金成町の文化財その9
- 栗駒町1963『栗駒町史』
- 栗駒町教育委員会1982「町内城館跡」『栗駒町の文化財』第10号
- 栗駒町教育委員会1989『風土記御用書上（栗駒町）』『栗駒町の文化財』第14号
- 栗駒町教育委員会1995「中世の供養碑 栗駒の板碑」『栗駒町の文化財』第20号
- 栗駒町教育委員会1978『鶴丸館跡』栗駒町文化財調査報告書第2集
- 栗駒町教育委員会1995『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第3集
- 紫桃正隆1990『戦国大名葛西家臣団事典』宝文社
- 仙臺叢書刊行会1922「仙臺古城記」仙臺叢書第4巻
- 志波姫町教育委員会1982『志波姫町の歴史』志波姫町の歴史シリーズ1
- 東北歴史資料館1979『伊豆沼古窯 熊刈A窯跡発掘調査報告』東北歴史資料館資料集I
- 東北学院大学佐川ゼミナール、藤原二郎2007『仰ヶ返り地蔵前遺跡』平成19年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨
- 築館町教育委員会1990、1992、1998『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第3、5、11集
- 築館町教育委員会2005『般鉢遺跡』築館町文化財調査報告書第18集
- 富谷町教育委員会2000『熊谷館跡ほか』富谷町文化財調査報告書第3集
- 前沢町教育委員会2005『国史跡白鳥館遺跡発掘調査報告書—第2・3次調査—』前沢町文化財調査報告書第19集
- 宮城県企画部土地対策課1986『土地分類基本調査 若柳・一闕』
- 宮城県教育委員会1978『歴史の道調査結果略報』宮城県文化財調査報告書第55集
- 宮城県教育委員会1979『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集
- 宮城県教育委員会1980a『大門遺跡』東北新幹線関連遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第62集
- 宮城県教育委員会1980b『原田遺跡』東北自動車道遺跡調査報告II』宮城県文化財調査報告書第63集
- 宮城県教育委員会1980c『木戸遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会1980d『宇南遺跡』東北自動車道遺跡調査報告IV』宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会1980e『八谷館跡』東北自動車道遺跡調査報告V』宮城県文化財調査報告書第93集
- 宮城県教育委員会1980f『佐内屋敷遺跡』東北自動車道遺跡調査報告VI』宮城県文化財調査報告書第93集
- 宮城県教育委員会1981『鶴ノ丸遺跡』東北自動車道遺跡調査報告V』宮城県文化財調査報告書第81集
- 宮城県教育委員会1998『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集（宮城県教育委員会HP参照）
- 宮城県教育委員会2002『刈敷館跡』『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第188集
- 宮城県教育委員会2005『吹伏遺跡』『境の腰遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第202集
- 宮城県史編さん委員会1954『風土記』『宮城県史』25 資料編3
- 宮城県史編さん委員会1958『風土記』『宮城県史』26 資料編4
- 宮城県史編さん委員会1960『宮城県史』30 史料集I
- 宮城県史編さん委員会1961『風土記』『宮城県史』28 資料編6
- 宮城県史編さん委員会1970『仙台領内古城書立之覚』『宮城県史』32 史料集III
- 宮城県多賀城跡調査研究所1978『伊治城跡I』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第3冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所1998『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』
- 室野秀文2004『屯ヶ岡の遺構』第27回蝦夷研究会発表資料
- 追町史編さん委員会1974『天正年中奥筋館主名元』『追町史編纂資料』第1巻
- 栗駒町公民館姫松分館1960「第十一章名所、旧蹟、伝説、その他」『姫松村誌』
- 藤沼邦彦1976『宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）』『東北歴史資料館 研究紀要』第2号
- 藤沼邦彦・神宮寺千恵1992「宮城県における一括出土の渡来銭－女川町御前浜出土の古銭を中心として－」『東北歴史資料館研究紀要』第18巻
- 古川市2001『古川市史』資料編I

写 真 図 版



空中写真（1962年、国土地理院）



三玉城跡全景、西より



調査地点、南より



調査地点、西上空より



三玉城跡全景、北より



堀切2、土塁2、堀切1、曲輪1、北より



調査前の調査区、西より



曲輪1と平場1、西より

写真図版 1

調査以前の三玉城跡



調査区全景、西側上空より



土壠3、堀切2、土壠2、堀切2、土壠1
西より



土壠3、堀切2、土壠2、堀切1、平場1
西より



土壠2、堀切1、曲輪1切岸、南東より



土壠2、堀切1、土壠1、曲輪1切岸、南西より



堀切1の底面、北より



堀切1北端の状況、南西より



堀切1と平場1、北西（土壠2の上）より



土里 2・曲輪 1 間の堀切 1 断面、南より



土里 2、堀切 1 断面、曲輪 1 切岸、南より



堀切 1 ABC 断面、平場 1、西より



堀切 1 AB 断面、西より



堀切 1 C 断面、東より



堀切 1 A 断面、東より



堀切 1 AC、南西より



堀切 1 A 断面、東より

写真図版 3

城館期の遺構（2）



土塁3、堀切2、土塁2、南より



土塁3、堀切2、土塁2、北より



土塁2断面、南西より



堀切2断面、南より



堀切2調査区南側断面、北より



土塁3断面、南東より



土塁3西側の整地層断面、東より



土塁3西側整地層から17m付近での断面、南東より



曲輪1、東より



曲輪1、東より



曲輪1、北東より



曲輪1、北東より



土里1、南東より



SK33、南より



SK34、東より



SK22断面、東より

写真図版5

城館期の遺構（4）



SK30、SK31、東より



SK30、SK31断面、北より



土壠1断面、北東より



曲輪1整地層断面、北東より



SK30、SK31、東より



平場1建物跡、北より



平場1整地層断面、北西より



平場1整地層断面、南東より



旧表土除去状況、西より



旧表土除去状況、南西より



旧表土除去状況、南より



SK25、南より



SK26、27、西より



SK26断面、北西より



SK27断面、北西より



SK28断面、北より

写真図版 7

城館期以前の遺構



No.	出土地・層位	種類	種別	特徴	登録
1	土器3付近底土・ 土器2付近底下層	須恵器	高台村坏	口縁部～底部破片。口径8.6cm。外面はロクロナデ。に赤い黄褐色10YR7/2、内面はロクロナデ、灰白色10YR7/1	R006
2	西側表土	土師器	壺	頭部破片。外面は横ナデ。不規。灰白色10YR7/2。内面は横ナデ。ハケメ。灰黃褐色10YR6/2。	R004
3	堀切1C 黒褐色土	土師質土器	坏	底部破片。外面はロクロナデ。に赤い橙7.5YR6/4。底部切り離し回転糸切りの後ナデか。内面はロクロナデ。に赤い橙7.5YR6/4。	R008
4	曲輪1田表土	鍔文土器	鉢	口縁部破片。外面は直線文。に赤い黄褐色10YR7/2。内面は斜め方向のナデ。に赤い橙7.5YR6/4。	R010
5	壺土	副製品	繩？	口縁部破片。口径推定31.4cm。外面に外耳あり。	R007
6	堀切1Aを埋める形 地盤	副製品	不明	破片。長さ2.9cm以上。幅3.1cm以上。厚さは縦で0.2cm。体部で0.1cm。縦を持つ。	R013
7	堀切1C 堆積土	鉄製品	釘	破片。長さ0.6cm以上。幅0.7~1.0m以上。厚さは0.7~0.8cm。頭部折り曲げか。断面四角形。	R009
8	SK20堆積土	石製品	砾石	破片。長さ5.0cm以上。幅2.1cm。厚さ1.6cm。重さ28g。凝灰岩。4面を使用し、使い込まれているため使用面はつぶれている。わずかに擦痕が観察できる。	R011
9	曲輪1表土	石製品	印き石	破片。長さ9.5cm。幅6.0cm。厚さ3.9cm。重さ225.6g。2面を使用している。	R001
10	平塚1表土	古鉄	水素通宜	中国鉄。1408年切跡。外径2.5cm。内径2.1cm。孔径0.7cm。厚さ0.1cm。重さ2.2g。	R003
11	土器2付近底下層	陶厚		胸型厚。重さ131.2 g。	R014
12	土器2付近	石器	剥片	長さ5.7cm。幅5.7cm。厚さ1.8cm。重さ52.0g。頁岩。打点。腹面にリング、フィッシュヤー。2次加工なし。	R012
13	堀切表土	石器	剥片	長さ6.5cm。幅5.0cm。厚さ1.8cm。重さ40.7g。玉髓。腹面にリング、フィッシュヤー。2次加工なし。	R002

写真図版8 出土遺物

報 告 書 抄 錄

栗原市文化財調査報告書 第8集

三 玉 城 跡

特別高圧送電線北上幹線新設工事に伴う発掘調査報告書

印 刷 平成20年3月20日

発 行 平成20年3月25日

発 行 宮城県栗原市教育委員会
〒987-2215
宮城県栗原市築館高田二丁目1番10号
TEL 0228-23-2228

印 刷 株式会社小野寺印刷所
宮城県栗原市築館伊豆一丁目7番3号
TEL 0228-22-3206
